

教皇ヨハネ・パウロ二世のカテケージス：キリストシリーズ

《キリストとは何者か》

「あなたたちは私を誰だと思うのか。」（マテオ 16・15）

これからしばらくの間、信仰とキリスト教的な生活にとって何よりも重要なテーマ、イエズス・キリストについて考えようと思います。まず、私たちにも冒頭に掲げた質問が向けられていることに注目してみましょう。二千年程前、主がペトロと弟子たちに投げかけられた質問です。御生涯のうちの決定的な瞬間に居合わせたマテオの筆を借りるなら次のようになります。「フィリッポのカイザリア地方に来られたイエズスは、弟子たちに『人々は人の子をだれだと言っているのか』と聞かれた。弟子たちは『ある人は洗者ヨハネといい、ある人はエリア、またある人はエレミアあるいは預言者の一人だと言っています』と答えた。するとイエズスは『ところで、あなたたちは私をだれだと思うのか』とおおせられた。」（同 16・13～15）

ペトロの率直で熱情あふれるこたえは私たちも知っているとおりで。「あなたはキリスト、生ける神の子です。」（同 16・16） 私たちもこのように、はっきりとした言葉で答えることができるでしょう。抽象的な言い回しでなく、御父からの恩寵の実りである生きた経験が放つ言葉で、一人ひとりが個人的にこの問いに答えなければなりません。（同 16・17 参照） 「あなたは私を誰だと思うのか。私について人々が話すのを聞いたあなたに答えてほしい。あなたにとって私はいったい何者なのか。」啓示を受けたペトロの信仰に満ちた答えは、長らくイエズスのおそば近く従い、師の語られるのを聞き、その生涯と使命をつぶさに見てきた証拠です。（同 16・21～24 参照）

私たちも、イエズス・キリストへの信仰を今以上にはっきりしたものにするためには、ペトロに倣って注意深く、心をこめて師に聞き入らなければなりません。キリストの証人であり、私たちの先生でもある十二使徒の手本に倣わなければならないのです。同時に、二千年の長きにわたる経験と証明を受け入れる必要があるでしょう。それは、キリストの問いかけに対し、あらゆる時、あらゆる所で無数の信者が声を合わせてきた歴史です。今日、「主であり生命の与え主」なる聖霊に促されつつキリストの王国の門口へと歩みを進める私たちは、新たな喜びをもって神に答えるよう求められています。神が靈感をお与えになり、そして私たちに期待なさる答えとは、私たちが自らの歴史のうちに再びイエズス・キリストを迎え入れることなのです。

私を誰だと思うのか。このイエズスの問いには、教育的な賢明さが感じられます。軽率な答えには信を置かず、じっくりと時間をかけて祈り、考え抜いたすえの答えをお望みだということです。教会が告白し、実践して来たキリストへの信仰に、注意深く、しっかりと耳を傾けなければなりません。

実際、イエズスという存在については、いかに理にかなった価値あるものであろうとも、単なる人間的な共感を寄せるだけでは十分ではないのです。同じく、歴史、神学、霊性あるいは社会学上の興味のみからイエズスについて考えるという態度も片手落ちといえまし

よう。キリストに関しては、キリスト者の間でさえ、無知、悲しむべき誤解、あるいは多くの不信が影を落としている有様です。「イエズスの福音」についてもいろいろなことが取り沙汰されています。それでいて、福音の偉大さや全てを包み込むその広大な本質は見落とされがちです。自らが告白する信仰に従った生活をしようともせず、福音を論じることもしばしばです。福音を尺度にする気概のない人、キリストの良き道具となるつもりのない人、またキリストの超自然的な神性を否定する人、あるいは歴史の中に生きたキリストの人性を忘れ去った人がいます。なおその上に、キリストの生涯と教えを貫く十字架上の犠牲という重要事を忘れ、この世でのキリストの〈秘跡〉として造られた教会の役割を無視して、ついには完全無欠なキリストのメッセージを歪曲するに至る、このような人々がなんと多いことでしょう。

こういった事態の中で、私たちはイエズスへの真の理解を深めよと駆り立てられています。世紀を経て御父は、かつてのペトロの場合のように、聖霊の御働きによって、イエズスに関するあまたの啓示を人々の心にお示しになりました。こうして信仰の証人たちは殉教に至り、敬虔な学者たちは信仰に照らされた知性を使ってイエズスという神秘を探り求め、とりわけ教会の教導職は聖霊の賜に導かれてイエズス・キリストに関する信仰箇条を定めてきたのです。

イエズスとは、本当に何者なのか。答えを見出そうとはやる私たちの心は確信が無く、不安げに探し求める福音書の登場人物の姿そのものです。「ある夜、イエズスの所へ」尋ねに来たニコデモ（ヨハネ 3・2 参照）、そして「イエズスを見ようと」木によじ登ったザケオ。（ルカ 19・4 参照） 全ての人々が、イエズスを見つけるための手助けがしたい。また、病人を癒し、罪人を救いに来られた御方（マルコ 2・17 参照）を人々に知らせたいとの熱意にかられて、私はこの仕事、すなわち、教会の構成員と全ての善意の人々にイエズスの姿を示すという重大な課題に取りかかりました。

皆さんは、私が教皇座に就いたとき、「キリストに扉を開こう」と呼びかけたことを覚えていらっしゃるでしょう。その後、第四回シノドスに出席された司教方の考えをまとめた『要理教育に関する使徒的勧告』の中で次のように述べました。「要理教育の本質的かつ第一の対象は…『キリストの秘義』である。要理教育を施すということは、ある意味で、確かにこの秘義をあらゆる面から探させることである。…キリスト自身において実現された神の永遠の計画を、そのキリストにおいて明らかにすることである。…キリストだけが私たちが聖霊において父の愛に導き、至聖三位一体の神の生活にあずからせることができる」と。（5 番）

今回のシリーズでは、次の四つの問題を中心に考えたいと思います。

- [1] 歴史上の実在人物であるイエズスと、超越的なメシア、アブラハムの子、人の子、神の子であるイエズス。
- [2] 福音書によれば、御父との深い交わりの中で、聖霊に鼓舞されていた真の神、真の人であるイエズス。
- [3] 教会の目から見たイエズス。教会は聖霊の助けを借りて啓示について調べ、啓示を解明し、特に公会議においてキリストに関する信仰の正確な定義を下した。

[4] 御生活とみわざからみたイエズス。贖いの受難と栄光におけるイエズス。私たち人間のあいだにおられるイエズス。世の終りまで御自分の教会と世界の歴史の中にましますイエズス。(マテオ 28・20 参照)

真のカテケージスとは

神の民にイエズスについてのカテケージスを施すときの教会の仕方は、本当に種々様々です。しかしいずれを選ぶにせよ、真のカテケージスとなるためには、聖書と聖伝という永遠の泉から教えの中身を汲み上げなければなりません。教父や教会博士たちの解釈、典礼、人々の信仰と敬虔、すなわち、教会の生き生きとした活力に満ちた聖伝に則って、教えなければならないということです。教会は聖霊の御働きの下にあります。主が約束してくださったように、聖霊は「あらゆる真理に導かれるであろう。自ら語るのではなく、聞いたことを語って未来のことを示されるであろう」から。(ヨハネ 16・13)

教会の聖伝は、公会議の教えの中に明確な形で表され統合されています。信仰宣言の中にまとめられ、信仰をもって啓示を究めた神学研究と教会の教導職によって深められてきました。

真実性と完全性とを欠くなら、イエズスに関するカテケージスは何の役に立つでしょうか。教会は、真正かつ完璧な見方でイエズスの秘義について考え、祈り、宣言してきました。

一方、教わる側の条件や必要をいかに考慮するか、という問題に関しては、教育上の賢明さが必要になります。先に引用した『要理教育に関する使徒的勧告』で述べたように、「全ての要理教師は、教会の中で果たす役割のいかんを問わず、自分の授業と態度によって、イエズスの教えと生活を伝えるよう努めねばならない」(6番)からです。

序論というべきこの考察を終えるにあたり、イエズスが投げかけたもう一つの問い、刺し通すように鋭い、逃れ得ない問いを思い起しましょう。イエズスに従う弟子たちの前に十字架が恐ろしい姿を現し、大勢が離れ去った時、イエズスは残った弟子たちにお尋ねになりました。「あなたたちも去っていきたくないか」と。ここでも代表として答えるのはペトロです。「主よ、だれのところに行きましょうか。あなたは永遠の命のことばを有しておられます。私たちは、あなたが神の聖なる御方であることを知っていますし、信じています」と。(ヨハネ 6・66~69)

この一連の考察によって、私たちがイエズスの問いかけに答えられるようもっとよく準備し、正しい答えを返すことができますように。そして力の限りを尽くして、キリストと生活を共にすることができますように。

《イエズス・キリスト 神の子・救い主》

前回のカテケージスで、キリスト教最初の信仰宣言に従ってイエズス・キリストについて考える新しい段階に入りました。使徒信経は宣言しています。「神の御独り子、イエズス・キリストを…信じます」と。ニケア・コンスタンチノーブル信経は、神の子としてのイエズス・キリストの出自についてこの上なく厳密に定義したのち、この神の御子は「わ

れら人類のため、またわれらの救いのために天よりくだり…人となり給えり」と言明します。周知のとおり、キリスト教の中核をなすのは次の二つの真理です。すなわち、イエズス・キリストは神の御子にして人の子である（キリスト論的真理）、これが一つ。父である神は、御子にして世の救い主であるキリストによって人類の救いを成し遂げられる（救世的真理）、これが二つ目です。

悪の問題、中でも罪の問題を扱うにあたり、すでに救い主イエズス・キリストについて話す下地は整えてきました。実に救いとは、悪、とりわけ罪からの解放を意味しているのです。聖書に記された啓示によると（創世の書第3章15節にみる）福音の原型とも言うべきものに始まり、人間の存在にまつわるあらゆる悪と罪から人間を解き放つことができるのはただ神のみ、という真理は明らかです。神は、世界の造り主であり世界を導く摂理として御自らを啓示なさると同時に、悪から、特に被造物が自由意志で犯す罪から解放する救い主であることをもお示しになっています。これこそ、摂理の働きによって始まった創造の計画の頂点であり、世界も（宇宙論）、人間も（人間学）、救い主である神も（救済論）、同じ摂理の内に堅く結ばれているしるしなのです。

第二バチカン公会議は述べています。キリスト信者は「この世界が創造主の愛によって造られ保たれ、キリストの十字架の死と復活によって、奴隷状態から解放された世界であることを信じている。」（『現代世界憲章』2番参照）

〈イエズス〉という名は、もとをたどれば〈ヤーウェが自由にする〉、救う、助ける、という意味です。バビロン捕囚以前には、この名は Jehosua と呼ばれていました。至聖なるヤーウェの名と共通の語源を持つ神的な名です。バビロンから戻ってからは Jeshua という省略形が用いられます。七十人訳ギリシャ語聖書は Jesoûs と書き表わしており、英語の Jesus はここから来たものです。旧約新約の時代を通じて、この名はしばしば見られます。たとえば、モーゼの死後イスラエルの民を約束の地へと導いたヨシュア Joshua がそうです。「彼はその名にふさわしく、神に選ばれた人たちを救い イスラエルをその地に迎え入れた。」（シラ 46・1）シラの子イエズスは、シラの書の編著者です。（同 50・27）ルカ福音書の救い主の系譜においては「エルの子イエズス」の名が見られ、聖パウロの協力者の中にも「ユストと呼ばれるイエズス」という人物がいました。（コロサイ 4・11）

しかしながらこの〈イエズス〉という名がナザレトのイエズスの場合ほど深く完全な意味をもったことはかつてありません。それは、天使がマリアとヨゼフに告げた名でした。（ルカ 1・31 参照、マテオ 1・21 参照）ところで、公生活の始めにあたりイエズスの名は、当時通っていた普通の意味で受け取られていたのです。

「モーゼが律法に記し、預言者が書き記している人に出会った。ヨゼフの子、ナザレトのイエズスという人だ。」最初の弟子の一人フィリッポがナタナエルにこう言うと「ナザレトから良いものが出るものか」という返事が戻ってきました。（ヨハネ 1・45～46）イスラエルの人々はナザレトをあまり高く評価していなかったようです。それでもイエズスは「ナザレ人」「ガリラヤのナザレトから出た預言者イエズス」と呼ばれ、ピラトが十字架上につけさせた文句も「ユダヤの王、ナザレトのイエズス」です。（マテオ 2・23 参

照、21・11、ヨハネ 19・19)

三十歳になるまで家族と共に住んでいた町の名前から、イエズスは「ナザレ人」と呼ばれていました。けれどもイエズスが生まれたのはナザレトではなく、エルサレムの南、ユダヤの一地方ベトレヘムだったのです。福音記者ルカとマテオが述べているとおりです。ルカの記述によると、ローマ当局から人口調査の命令が出たので「ヨゼフはすでに妊娠していた妻のマリアと共に、ガリラヤのナザレトの町からユダヤのダビドの町ベトレヘムに came。そこにいる間に、マリアは月満ちて初子を産んだ。」(ルカ 2・4～6)

預言の成就

聖書に出てくる他の場所と同じく、ベトレヘムにも預言的な価値があります。ミカヤの預言に言及して(5・1～3)、マテオはこの小さな町が救い主の生まれる所と記しています。「ユダの地ベトレヘム、おまえはユダの村々の中でもっとも小さなものではない。わが民イスラエルを牧するかしらはおまえから出るからである。」(マテオ 2・6) 預言者はつけ加えます。「その出はずっと以前、昔の日々にさかのぼる。」(ミカヤ 5・1)

ヘロデの相談を受けた祭司と律法学者たちが、救い主誕生の地を尋ねに来た東方の博士たちに答えるため参照したのがこの預言です。

マテオ福音書によると、「イエズスはヘロデ王のとき、ユダヤのベトレヘムで生まれ」ました。(マテオ 2・1) 第四福音書はミカヤの預言に触れて「聖書には、キリストはダビドの子孫から、そしてベトレヘムから出ると言われているではないか」と述べています。(ヨハネ 7・42)

これらの史実から、イエズスがパレスチナに住んでいた歴史上の人物であることは明白です。モーゼやヨシュアのような人物に歴史的信憑性ありと考えて良いなら、イエズスの歴史的実在についてはそれ以上に確実であると言わねばなりません。福音書がイエズスの生涯について詳しく語っていないのは、その第一の目的が伝記を書くことではなかったからです。しかし、福音書を批判的かつ誠実な態度で読んでみると、ナザレトのイエズスが特定の時代・特定の場所に生きていた歴史上の人物であるという結論に達します。純粹に学問的・史的観点から見ても、イエズスの肯定論者よりも否定論者の用いる神話論の方に驚かされてしまいます。今日でもこういう学者がいるようですが…。

イエズスの正確な生年月日については専門家の間でも意見が分かれています。西暦 533 年に修道士ディオニシウス・エクシグウスは、年代の計算をローマ創建からでなく、キリスト生誕の年から数えることを提案しましたが、この計算は正しくありませんでした。最近まで、四年ほどのずれがあると言われていましたが、この問題はまだ決着がついていません。

イスラエル人の伝統では、今も〈イエズス〉の語源から来る意味を保っています。すなわち「神が自由にする。」昔から子供の名づけは両親の役目でした。ところが、マリアの子イエズスの場合、すでに生まれる前からいと高き御方がその名をお選びになり、天使を通してマリアに、そしてヨゼフには夢の中でお告げになっていました。(ルカ 1・31、マテオ 1・21) 「イエズスと名づけなさい」と、福音記者ルカは力強く語っています。

「胎内に宿る前に、天使の告げた」名であったのです。(ルカ 2・21)

神の摂理の計画により、ナザレトのイエズスは救いを暗示する名、つまり「神が自由に
する」という名をお取りになりました。実際その名の意味する通りの御方、〈救い主〉で
した。このことはイエズスの幼年時代に詳しいルカ福音書の次の一節からも読み取れます。
「あなたたちのために救い主が生まれたもうた。」(ルカ 2・11) マテオでは「彼は罪
から民を救う方である」となっています。(マテオ 1・21) これらは、新約聖書全体の中
で示され宣言されている言葉です。たとえば、使徒パウロはフィリッピ人への書簡の中
で述べました。「そこで神はキリストを称揚し、すべての名にまさる名を与えられた。そ
れはイエズスの御名の前に…すべてのものがひざをかがめ、すべての舌が…『イエズス・
キリストは主である』と宣言するためである」と。(フィリッピ 2・9~11)

イエズスが称揚される理由は、勇敢な使徒が断言した次の言葉に示されています。「救
いは主以外の者によっては得られません。この世においてわれわれの救われる名はそのほ
かにないからです。」(使徒行録 4・12)

《聖霊によって処女マリアより生まれたイエズス》

前回は〈救い主〉を意味する〈イエズス〉の御名について考えました。ガリラヤの町ナ
ザレトで三十年間をお過ごしになったイエズスは「聖霊の御力によってお宿りになり、処
女マリアよりお生まれになった」御方、神の永遠の御子です。信仰宣言、使徒信経、ニケ
ア・コンスタンチノーブル信経でこの信仰を宣言します。これは教会の教父たちと公会議
が教えてきたことです。これによると、神の永遠の御子イエズス・キリストは、「御母の
実体よりお生れになった」ということになります。(アタナシウス信経 DS 76) そこで
教会は、イエズス・キリストが、アダムの子孫であり、アブラハムとダビドの子孫にあたる
処女マリアのうちに懐胎されお生まれになったことを公言します。

ルカの福音書によれば、マリアは「男を知らずに」、聖霊の御力によって神の御子を宿
されました。(ルカ 1・34、マテオ 1・18、24、25) つまりマリアは、イエズスの出産以
前も、出産の時も、出産の後も、処女のままであられたということです。これは新約聖書
が記す真理です。553年コンスタンチノーブルの公会議では、「永遠の処女マリア」とい
う表現を使っています。また649年のラテラノ教会会議においても「終生処女である神の
母マリアが、すべての世紀の前に父なる神から生まれた神のみことばを、終りの時に、種
なしに、聖霊によって受胎し、処女性を傷つけずに生み、出産後も処女性を保ったことを」
教えています。(DS 503)

マリアの同意

使徒たちの教えにもこの信仰が伝えられています。たとえば、聖パウロのガラツィア人
への手紙にはこう記されています。「神は、時満ちて御子を女から生まれさせ…遣わされ
た。…私たちが養子にするためであった。」(ガラツィア 4・4~5) 一般に「幼年期の
福音書」と呼ばれているルカとマテオの福音の最初の章には、イエズスの託身と誕生に関
する出来事が詳しく記されていますが、ここでその場面に注目してみましょう。

なかでも特にルカが記す次の場面はとともよく知られています。聖体祭儀で読まれ、お告げの祈りにも取り入れられているからでしょう。その一節はマリアへのお告げの場面です。ちょうど洗礼者聖ヨハネが生まれるという知らせの六ヵ月後でした。

「天使ガブリエルは、ガリラヤのナザレトという町の、ダビド家のヨゼフといいなずけであるマリアという乙女のもとに、神から遣わされた。」（ルカ 1・26） 天使は語ります。「あなたに挨拶します、マリア。」これが教会の祈り「天使祝詞」です。マリアは天使の挨拶に当惑します。「マリアはこれを聞いて心乱れ、何の挨拶だろうと考えていると、天使は『恐れるな、マリア。あなたは神の御前に恩寵を得た。あなたはみごもって子を生む、その子をイエズスと名づけなさい。それは偉大な方で、いと高きものの子と言われます。』」マリアは『わたしは男を知りませんが、どうしてそうなるのですか』と聞いた。天使は答えた。『聖霊があなたに降り、いと高きものの力の影があなたを覆うのです。ですから生まれる子は聖なる御方で、神の子と言われます。』」（ルカ 1・29～35） こう告げてのち天使は、マリアの親戚で生まず女と言われていたエリザベトが老人ながらみごもったことをしるしとして与え、こう言います。「神にはできないことはありません。」するとマリアは「わたしは主のはしためです。あなたの御言葉のとおりになりますように」と答えました。（ルカ 1・37～38）

聖霊の働きによってキリストを生んだのは母であると同時に処女であるマリアでしたが、教会のこの教えの根拠になるのがルカ福音書なのです。マリアが「なれかし」「あなたの御言葉のとおりになりますように」と言われたとき、聖霊による驚くべき御宿りが成就しました。これは神の御子の託身の秘義が成就した最初の瞬間でした。

イエズスがお生まれになる以前の状況について、ルカより詳しく記しているのがマテオです。「イエズス・キリストの誕生は次のようであった。母のマリアはヨゼフのいいなずけであったが、同居するより以前に、聖霊によってみごもっているのがわかった。夫のヨゼフは正しい人だったので、彼女を公に辱めようとせず、ひそかに離別しようと決心した。彼がこうしたことを思い煩っていたとき、突然夢の中に主の天使が現われて言った『ダビドの子ヨゼフよ、ためらわずにマリアを妻として迎えよ。マリアは聖霊によってみごもっている。彼女は子を生むからその子をイエズスと名づけよ。なぜなら彼は罪から民を救う方だからである。』」（マテオ 1・18～21）

幼年期に関するこの二つの福音書は、イエズスが、聖霊によって人となり、処女マリアからお生まれになったという最も重要で基本的な点で一致しています。また、二つの福音書は互いに補い合っています。すなわち、この驚くべき出来事が起った状況を明らかにするのに、ルカはマリアの側から、マテオはヨゼフの側から記しているのです。

この福音書の話の源がどこからのものかを明らかにするのに、ルカの次の記述に注目しましょう。「マリアは注意深くそのことを心にとどめて考え続けた。」（ルカ 2・19）ルカはこれを二ヵ所に記しています。最初はベトレヘムから羊飼いたちが帰ったあと、二度目は神殿にイエズスを見出したあとです。（ルカ 2・51 参照）福音史家ルカ自身が「幼年期の福音書」を書くにあたって用いた情報源がイエズスの御母であったと教えてくれるのです。新約聖書が書かれ、初期キリスト教の聖伝が起りつつあった使徒の時代に

「そのことを心にとどめられた」（ルカ 2・19 参照）マリアは、キリストの死と復活ののち、自らに関する事、神の母としての役割に関する事について証人になることができたのです。

マリアは処女でありながら懐胎した、と福音書が証言していますが、これは神学上すこぶ重要な事実です。それは、マリアの御子が、本来神であることの特別なしるしとなるものだからです。「人間の介入なし」に生まれたイエズスにはこの地上における父親はいません。この事実は、イエズスが神の御子であり、また人間としての本性を備えていても、その御父は神のみであることを明らかに示すものです。

イエズス懐胎に聖霊の御力があつたことは、超自然の性格を備えた新しい「霊的誕生」という人類史の始まりです。（コリント①15・45～49 参照）このようにして三位一体の神は聖霊を通して被造物に働きかけてくださいます。詩篇作者の言葉がこの秘義を讃えています。「あなたが息を送れば、彼らはつくられ、地の面は新たにされる。」（詩篇 03・30）聖霊の御力によるイエズスの御宿りは、神が御自分を被造物にお示しになるという計画の、最も中心・頂点となるものです。それは「新たな創造」の始まりです。このように神は人間を超自然の目的に向けるため、また全てのものをキリストのうちにその目的に向けるために、決定的な形で歴史に介入なさるのです。ここに、人間に救いをもたらす神の愛がはっきりと現われています。

救いの計画が成就される時、そこにはいつも被造物が関与しています。聖霊の御力によるイエズスの御宿りにおいてマリアは決定的な仕方に関与なさいました。御母として召し出され、しかも処女のままでいるという天使のお告げを受けて、マリアは心の内でそれを理解し、自らの意志を表し、「いと高き者の力」のいやしい道具となることを承諾しました。これは人間にとってとても理解しがたいことですが、聖霊は母性と処女性がマリアにおいて同時に存在するように働きかけられました。神の全能と愛のなせるわざです。イザヤの預言「処女がみごもって子を生む」（イザヤ 7・14 参照、マテオ 1・22～23）が、マリアにおいて実現したのです。旧約聖書はマリアの処女性を、貧しさと神の計画に喜んで協力する心のしるしとして記していますが、この処女性こそ、マリアを救い主の母に選ばれた神が至高のわざをなさる場となったのです。

マリアの特質はマテオとルカが記す家系にも見られます。ユダヤ人の習慣に則って、マテオの福音はイエズスの系図から始まり、男性の家系がアブラハムから連ねられています。（マテオ 1・2～17）マテオはヨゼフが法律上の父であることを通して、アブラハムとダビドからイエズスへとたどれば、結局は、救い主へと合法的につながることを明らかにしたかったのです。しかしながら、系図の終りにはこう記されています。「ヤコブはマリアの夫ヨゼフを生み、このマリアからキリストと呼ばれるイエズスが生まれた。」（マテオ 1・16）マリアの母性をこのように記すことで、この福音史家は処女懐胎の事実、つまりイエズスには人として人間の父はいないことを暗黙のうちに強調しているようです。

一方、ルカの福音が記す系図は、イエズスからさかのぼりアダムへと至ります。（ルカ 3・23～28）福音史家はイエズスと全人類の結びつきを示したかったのです。神が永遠の御独り子に人性をお与えになるとき、その協力者となったマリアはイエズスと全人類をつ

なく絆となったのです。

《選ばれた民イスラエルの子 イエズス》

今回はイエズスの二つの系図について述べました。その一つ、マテオの福音による系図は、先祖から子孫へと下降するように記されています。つまり、アブラハムから順に、マリアの御子イエズスの先祖が連ねられているわけです。一方、ルカの福音の系図は、イエズスから始まりアブラハムへとさかのぼって記されています。

ルカの系図がイエズスと〈全人類〉の結びつきを示すのに対し、マテオの系図はイエズスが〈アブラハムの子孫〉であることを明確に示したものとといえるでしょう。ナザレトのイエズスは人類家族の一員でしたが、それは、旧約の選ばれた民、すなわちイスラエル直系の子としてであったのです。

イエズスはイスラエルの民の中で〈お生まれになり〉、この民の宗教と文化の中で育ちました。まさに真のイスラエル人で、思考や言葉も、当時の人々と同じ部類に属しておられたわけです。したがって、アラム（アラマイ）語で考えたり表現したりなさいました。また、その周辺の習慣やしきたりにも従われ、〈一人のイスラエル人として〉旧約の忠実な継承者でありました。聖パウロはローマ人への手紙の中でこの点について強調しています。「彼らはイスラエル人であって、神の養子とされたことと、栄光と、契約と、律法と、礼拝と、約束をもっている。太祖らも彼らのものであり、〈人間としてはキリストも彼らから出られた〉。」（ローマ 9・4～5） またガラツィア人への手紙の中でも、キリストは「律法のもとにお生まれになった」と書いています。（ガラツィア 4・4）

律法と伝統に忠実を保つ

御降誕の後まもなく〈イエズスはモーゼの律法が定める儀式の規定に従って割礼をお受けになりました。〉このように公に契約の民に加わったのです。「子どもに割礼を行なう八日目になったので、その子の名をイエズスと名づけた。」（ルカ 2・21）

イエズスのご生涯の初期に関する記述は少ないのですが、それでも幼年時代に関する福音には次の記述を見ることができます。「両親は過越祭に毎年エルサレムに上っていた。」これによってイスラエルの律法や伝統を忠実に守っておられたことがわかります。「イエズスが〈12歳になった年に〉、習慣どおり祝日のために上京した。帰るとき、少年イエズスはエルサレムに残られた。両親はそれを知らなかった。」そして三日間捜したのち「神殿で学者の中に座り、聞いたり尋ねたりしておられるイエズスを〈見つけた〉。」そして、マリアとヨゼフの喜びに重ね合わせるように書かれてあるのが次の言葉です。「なぜ私を捜したのですか。私が私の父の家にいるはずだと知らなかったのですか。」（ルカ 2・41～43、46、49）

イエズスの幼年期に関することは、この出来事以外はほとんど福音書に記されていません。それは「隠れた生活」と言われる時期で、ルカが簡単にその時期を要約しているだけです。イエズスは、「彼ら（マリアとヨゼフ）と共に下り、ナザレトに帰って二人に従って生活され」、「神と人の前に、その知恵も背丈も寵愛もますます増していられるのだっ

た。」（ルカ 2・51、52）

福音書から、イエズスはヨゼフの家で〈御自分の家族と共に〉生活なさったことがわかります。ヨゼフはマリアの子を助け、守り、少しずつ大工の仕事を教えながら父の役目を果たしました。ナザレトの人々はイエズスを「大工の息子」とみなしていました。（マテオ 13・55 参照）イエズスが教えをのべ始められると、町の人々は驚いて「あれはマリアの子ではないか？」（マルコ 6・3）と尋ねます。人々は、マリアの名のほかにはイエズスの「兄弟姉妹」に触れていますが、兄弟姉妹とはナザレトに住むイエズスの親戚（いとこ）のことを指しています。マルコの福音によれば、イエズスに教えるのをやめさせようとしたのはその親戚筋だったのです。（マルコ 3・21 参照）彼らには、なぜイエズスがそのような新しい活動を始めるのか理解できませんでした。イエズスは他のイスラエル人たちと何ら変わることはないし、また当然そうだと考えていたからです。

イエズスが公に教えを述べ始められたのは、三十歳のときでした。そして最初の説教を〈ナザレト〉でなさいました。「いつものように安息日に会堂に入り、立って朗読されようとする、手渡されたのは預言者イザヤの書であった。」イエズスは次の言葉で始まる一節をお読みになりました。「主の霊は私の上にある。貧しい人々により便りをもたらすために、私を遣わされた。」そしてその場に居合わせた人々の方を向き、「あなたたちが今聞いたこの聖書の言葉は 今日実現した」と仰せになりました。（ルカ 4・16～18、21）

ナザレトから始まり、ガリラヤ、ユダヤ、そして首都エルサレムに及ぶ〈説教〉の中で、イエズスはイスラエルの豊かな宗教的伝統を大いに活用なさいました。新たな洞察を加え、手がかりとなる意味を示し、預言的見通しを説明なさいました。また、契約の神のご計画から逸脱することを躊躇せず戒められたのです。

このようにして、同一の啓示の範囲内で〈旧〉から〈新〉への移行を、〈法〉を廃止することによってではなく、完成させることによって実現なさいました。（マテオ 5・17）この考えがヘブライ人への手紙の冒頭を飾ります。「神は何度もいろいろな方法で、その昔預言者を通じて先祖に語られたがこの終りの日々には…その子を通じて語られた。」（ヘブライ 1・1）

この〈旧〉から〈新〉への移行は、ナザレトの「預言者」の全ての教えの特徴とも言うべきものです。マテオの福音書に記されている〈山上の説教〉が、これを明白に示しています。「知っての通り、昔の人は〈殺すな〉と教えられた。だが言う、兄弟に怒る人はみな裁きを受ける。」「知っての通り〈姦通するな〉と今まで教えられている。だが私は言う、色情をもって女を見れば、その人はもう心の中で姦通している。」「知っての通り、〈隣人を愛し、敵を憎め〉と教えられた。だが私は言う、あなたたちは敵を愛し、迫害する人のために祈れ」と仰せになると同時に「私が律法や預言者を廃すために来たと思っではならぬ。廃しようとして来たのではなく完成するために来た」とも仰せになりました。（マテオ 5・21～22、27～28、43～44、17）

この〈完成〉という言葉は、鍵となるもので、神によって啓示された真理を教えることに言及するばかりでなく、イスラエル、すなわちイエズスをその子とする民の全歴史にも言及するものです。契約の神の力強い御手によって、はじめから導かれていたこの驚くべ

き歴史は、イエズスの内にその完成を見ました。〈契約の神がはじめから歴史の内に示された御計画〉によって、その歴史は救いの歴史となりましたが、その御計画は「時が満ちる」（ガラツィア 4・4）その時に向けて準備されていたのです。そしてイエズス・キリストのうちに実現しました。ナザレトの「預言者」は故郷の会堂における説教の中で、その実現をはっきりとお示しになったのです。

ヨハネの福音に記されているイエズスの御言葉がそれを雄弁に語っています。「あなたたちの父アブラハムは私の日を見たいと思って喜びにあふれ」と仰せになりました。すると皆が不信に思い、「あなたはまだ五十歳にもならないのにアブラハムを見たのですか」と尋ねると、イエズスは「まことにまことに私は言う、アブラハムが存在する以前に私は存在する」と、明示するかのごとく断言なさいました。（ヨハネ 8・56～58 参照）イエズス御自身が、アブラハムの時代からイスラエルの歴史に刻まれていた神の御計画の完成であることを、自ら断言すると共に、御自らが「在すもの」（脱出 3・14）であることまでお示しになり、その存在がアブラハムより以前のものであることを断言なさいました。イエズス・キリストは「在すもの」なるゆえに、イスラエルの歴史の完成です。〈御自分の秘義によって〉イスラエルの歴史を超えられたからです。ここでキリスト論の一面に触れるのですが、それはまた後に述べることにしましょう。

今回は、マテオとルカの福音史家が記す二つの系図を考えて締めくくります。この二つの系図から、イエズスが本当にイスラエルの子であり、イスラエルの子であるゆえ、全人類の家族の一人であることがわかります。アブラハムの子孫であるイエズスの内に、旧約の預言が完成を見るわけですから、聖パウロの教えに従って、アダムの子孫としてのイエズスこそ、全人類を集めるための要、源であることがわかるのです。（エフェソ 1・10）

《イエズス・キリスト 救い主・王》

マテオ福音書の冒頭に記されたマリアの子イエズスの系図は、「キリストと呼ばれるイエズス」という表現で結ばれています。（マテオ 1・16）ギリシャ語の〈キリスト〉はヘブライ語の〈メシア〉の同義語で〈油を注がれたもの〉を意味する語です。神に選ばれた民イスラエルは、幾世代にもわたってメシアの約束が成就することを切望し続けてきました。メシア到来は契約の歴史を通して準備されていました。神より遣わされた油を注がれたもの、すなわちメシアがこられ、契約の民への招きを完成させることになっていたのです。この民には、神とその救いの御計画についての真理を、啓示によって知る特権が与えられていました。

ナザレトのイエズスに〈キリスト〉の名が帰せられたのは、契約の神の御計画とイスラエルの民の切望がイエズスの内に実現したことを、使徒たちと初代教会が理解した証です。これはまた、聖霊降臨の日にペトロが宣言した事柄でもあります。ペトロは聖霊に導かれて、エルサレムに住む人々や祭りに集まってきた巡礼者に、初めて次のように語りました。「イスラエルの全ての人、あなたたちが十字架につけたそのイエズスを、神が主としキリストとされたことを、しかと知らねばなりません。」（使徒行録 2・36）

油を注がれたもの

ペトロの語ったこの言葉と、マテオの記す系図は、旧約聖書に記された〈メシアーキリスト〉という語が、実にゆたかな内容をもつものであることを示しています。次にこれについて考えてみましょう。

注油するという意味を含む語〈メシア〉はもちろん油を注ぐことに関してのみ理解することができます。それは周知のように、イスラエルにおいて広く行なわれ、旧約から新約へと伝えられてきたことです。旧約時代には、王と司祭と預言者の任務や位に、神によって召された人々が油を注がれていました。

旧約の時代にこの三つの〈職務〉は、神の民を導き、その代表となるべき人々に授けられるものでした。こういう聖書の背景を踏まえてキリストーメシアについての真理を理解しなければなりません。今ここでは、王であるキリストの職と尊厳について考えてみましょう。

大天使ガブリエルが、あなたは救い主の母になる召命を受けたと処女マリアに告げたとき、その御子の王権について語りました。

「その子は主なる神によって父ダビドの王座を与えられ、永遠にヤコブの家を治め、その国は終ることがない。」（ルカ 1・32～33）

大天使ガブリエルのこの言葉は、ダビド王になされた約束と符合するものです。「時がくれば私はおまえの子孫に跡をつがせ国のもとを固めさせよう。その子孫は私の名のために家を建て、私は、彼の王座を〈永久に固いもの〉にしよう。私はその者の父となり、その者は私の子となる。」（サムエル下 7・12～14） この約束はある意味で、ダビドの息子であり、王位継承者でもあるソロモンにおいて成就したといえるのですが、その約束が真に意味するものは、地上の王国の境をはるかに越えたものであり、遠い未来にとどまらず、歴史、時、空間を超越したものです。「私は彼の王座を永久に固いものにしよう。」（サムエル下 7・13）

マリアへのお告げの中でイエズスは、そのうちにおいて古来の約束が実現する御方として現わされます。このように、王としてのキリストの真理は、〈メシア・王〉という表現で聖書が記す伝承のうちに見出すことができます。ナザレトのイエズスの使命を語りその教えを伝える福音書には、〈メシア・王〉という表現のもとに王であるキリストの真理が多く記されています。

この点を考えれば、イエズス御自身の対応の仕方には実に多くの意味が含まれているのがわかります。たとえば、盲人で乞食のバルティメオが「ダビドの子イエズス、私をあわれんでください」と助けを求めて叫ぶと、初めてこの呼び名を耳にされたイエズスは、バルティメオが叫んだ呼び名をそのままお受けになりました。（マルコ 10・47） 必要ならその言葉の意味をはっきりさせようと思われたのでしょうか。事実、ファリサイ人の方を向き「あなたたちはキリストについてどう考えているのか。それはだれの子か」とお尋ねになりました。すると彼らは「ダビドの子です」と答えたので、イエズスは、「そうするとダビドが靈感を受けて、彼を主と呼ぶのはなぜだろう。『主は私の主に仰せられた。〈私が敵を足の下におくまで、私の右に座れ〉』と書かれている。ダビドは彼を主と呼んでい

るのに、なぜ子なのか」と尋ねられました。（マテオ 22・42～45）

このようにイエズスは、メシアをダビドの王位継承に結びつけ、ただイスラエルの伝承だけをもとにして理解しようとする、視野の狭い不十分な態度を注意なされたわけです。しかしその伝承を否定されることなく、全ての意味においてそれを完成なさいました。それはすでにお告げの中で語られたことであり、過越においてははっきり示されるはずのことだったのです。

実現

もう一つの重要な事実を見ましょう。イエズスは受難の直前にエルサレムに入り、マテオとヨハネが記すように、ザカリアの預言を成就なさいました。（マテオ 21・5、ヨハネ 12・15）そこでも〈メシア・王〉と表されています。「シオンの娘よ、喜び勇め、エルサレムの娘よ、喜び踊れ。見よ、王が来られる、正しいもの、勝利のものが。彼は謙虚なもので、ろばに乗って来られる。子ろば、雌ろばの子に乗って。」（ザカリア 9・9）「シオンの娘に言え、〈王が来られる。牝ろばと荷を担うけものの子、小ろばに乗るへりくだるひと〉。」（マテオ 21・5） 実にイエズスは、熱狂的な歓声「ダビドの子にホザンナ」の中を小ろばに乗ってエルサレムに入城されたのです。（マテオ 21・1～10 参照）そして、ファリサイ人の憤りをよそに、「こどもたち」のメシアへの歓呼をお受けになりました。（マテオ 21・16、ルカ 19・40） イエズスは、メシアという呼び名のあいまいさが、受難を通して栄光を受けることによって一掃されることをご存じだったのです。

王位を地上の権力と考えれば混乱しますが、聖書の言葉がこれを明らかにしています。イエズスのエルサレム入城以後の日々を考えれば、お告げの時の天使の言葉、つまり「その子は主なる神によって父ダビドの王座を与えられ、永遠にヤコブの家を治め、その国は終ることがない」という言葉を、どのように理解すべきかがわかります。イエズス御自らその王権の本質、すなわちメシアについての真理とそれを理解する方法をお示しになることでしょう。

これを明らかにする決定的瞬間が、ヨハネ福音書のイエズスとピラトの会話の中にあります。イエズスがローマ総督の前に、〈ユダヤ人の王〉であると主張したと訴えられたので、ピラトはこの訴えについて尋ねます。ローマにとってこれはすこぶる重大なことでした。なぜなら、もしイエズスが本当に〈ユダヤ人の王〉だと言い、弟子たちもそうと認めているならば、それは帝国を脅かしかねないことだからです。

「あなたはユダヤ人の王か？」という問いに、イエズスは「あなたは自分でそう言うのか。あるいは、ほかの人が私のことをそう告げたのか」とお尋ねになり、ついで説明を加えられました。「私の国はこの世のものではない。もし私の国がこの世のものなら、私の兵士たちはユダヤ人に私を渡すまいとして戦っただろう。だが、私の国はこの世からのもではない」と。つぎにピラトが「するとあなたは王か？」と尋ねると、イエズスは「あなたの言うとおり私は王である。私は真理を証明するためにこの世に来た。真理につくものは私の声を聞く」とお答えになりました。（ヨハネ 18・33～37） このイエズスのはっきりした御言葉の中に明白な事実を見出すことができます。つまり、神より遣わされたメ

シアであるキリストの使命に結びついた王としての本質や任務は、地上の権力を問題にする政治的な意味においても〈選ばれた民〉イスラエルとの関連においても理解されるものではないということ。

当時のユダヤ人の間で広まっていた考え、つまり〈メシア・王〉を地上の政治的な王とする考えとキリストの〈メシア・王〉の概念とが一致しなかったことは、イエズスの裁判の結論からも明らかになります。「王であると主張した」としてイエズスは死の判決を受けられました。十字架上の札には〈ナザレトのイエズス、ユダヤ人の王〉と記されました。ローマ当局にとってはそれがイエズスの罪状だったのです。矛盾しているのですが、この地上に〈ダビドの王国〉を再建することを熱望し続けたそのユダヤ人たちは、笞打たれ茨の冠を被せられ、「これがおまえたちの王だ」というピラトの言葉とともに引き出されたイエズスを見て「十字架につけよ…私たちの王はチェザルのほかありません」と叫んだのでした。（ヨハネ 19・15）

ローマ総督の前での取り調べに、イエズスがはっきりと仰せになったあの答えを考えれば、キリストの十字架につけられた札の意味がさらによくわかります。キリストの答えが示す意味においてのみ、キリストーメシアは〈王〉なのです。そして、この意味においてのみ、旧約聖書に記され、契約の民の歴史に刻まれた〈メシア・王〉の伝承がイエズスのうちに実現するのです。

カルワリオにおける最後の出来事を見ましょう。これはイエズスが王たる救い主であることを如実に表すものです。イエズスとともに十字架につけられた罪人の一人が、印象深く真理を明示しています。「イエズス、あなたが王位を受けて帰られるとき、私を思い出してください。」すると、イエズスは仰せになりました。「まことに私は言う、今日あなたは私と共に天国にいるであろう。」（ルカ 23・42）ここで、天使がお告げの中で語ったあの言葉を私たちは理解できるのです。「イエズスは治め、その国は終ることがない。」（同 1・33）

《イエズス・キリスト メシア・司祭》

周知のように〈キリスト〉というギリシャ語は〈メシア〉の同義語で〈油を注がれた者〉を意味します。旧約聖書の伝承によれば、この〈キリスト〉という名は、前回のテーマであった〈王〉という性格と共に〈司祭〉という性格をも備えているということです。メシアの使命に属する要素として、この二つの性格は互いに異なるものでありながら、また相互に補い合う関係にもあります。旧約聖書に記されているメシアの姿は、王としての使命と司祭としての使命の深い一致を示し、両方の要素を含んでいるわけです。

ずっと昔に、この一致を見ることができます。その原型と前兆は、アブラハムの時代の旧約聖書に描かれている神秘的な人物、すなわちサレムの王メルキセデクです。創世の書にアブラムを出迎えるメルキセデクが登場します。「メルキセデクもパンとぶどう酒を供えた。メルキセデクは、いと高き神の祭司だったからである。彼は次のように言ってアブラムを祝福した『天地の創造主、いと高き神によって、アブラムは祝されよ。』」（創世 14・18～19）

王であり祭司であるメルキセデクの姿は、メシアの詩篇と呼ばれる詩篇 109 (110) に記されているメシアの伝承と重なりあっています。詩篇の中で、神ヤーウエは語ります。「私の主 (すなわちメシア) に神のみことば、『私の右に坐れ、私は敵をあなたの足台としよう。』 主はあなたの力あるつえを、シオンから広められる。あなたの敵を治めよ。」 (詩篇 09・1~2)

ヤーウエの語りかける御者が王の特質を備えていることは疑いようありません。そして詩篇は、「主はそう誓われた。悔いることはあるまい。『あなたは永遠の司祭、メルキセデクの位に等しく』」と続きます。神ヤーウエが「右に坐れ」と語りかけるのは明らかに「メルキセデクの位に等しい」王であり司祭である御者です。(詩篇 09・4)

礼拝と償いの犠牲

イスラエルの歴史において、旧約聖書が定める司祭職の制定は、モーゼの弟であるアロンにさかのぼります。そしてその司祭職はイスラエルの十二族の一つであるレビ族に世襲されることになっていました。

この点についてシラの書に重要な記述があります。「主は、アロンを高く上げられた。それはモーゼの兄弟…レビ族の人だった。主はアロンと永遠の契約を結び、民の祭司職を与えた。」「彼は生きる人の中から選ばれ、主にいけにえをささげ、香と記念の香炉をたき、民のために償いを行なった。主は (アロンに) おきてを授け、律法の規定をまかせられたので、彼はヤコブに主の証を教え、イスラエルを主の律法で導いた。」 (シラ 45・6~7, 16~17) 祭司が選ばれるのは礼拝のため、また賛美と償いのいけにえを捧げるためでした。ところでこの礼拝は、神とその掟を教えることにもつながっていたのです。

このシラの書に、さらにもう一つ意味深い箇所があります。「ダビドにも契約が結ばれ…子どものうちのただ一人だけが父から相続するが、アロンの相続は子どもの皆が受け継ぐ。」 (同 45・25)

この伝承によれば、司祭職は王の尊厳に〈並んで〉位置するものです。しかしイエズスは、司祭職を世襲するレビ族からではなくユダ族から出られたため、メシアの司祭としての性格はイエズスに合わないように思えるかも知れません。イエズスの時代の人々は、イエズスを教師、預言者あるいはダビドの後継ぎ、彼らの〈王〉とみなしていました。従って、メルキセデクの伝承、つまり王であり祭司であるという伝承はイエズスの内に見ることができなかったというわけです。

しかしながら、その考えは外見からのみ判断した不十分なものでした。過越祭の出来事が〈メシア・王〉そして、〈メルキセデクの位に等しい王・祭司〉の真に意味するところを明らかにしています。それは旧約聖書に記され、ナザレトのイエズスにおいて実現したことです。衆議所での裁判の席で、「あなたは神の子キリストなのか」と尋ねる大司祭に対し、イエズスは次のようにお答えになりました。「その通りである。私は言う、人の子が全能なるものの右に坐るのを…あなたたちは見るであろう」と。(マテオ 26・63, 64) この返答は、王であり司祭という伝承を述べるメシアの詩篇の内容に言及しています。(詩篇 09)

この真理を完全に言い表しているのがヘブライ人への手紙で、レビ族が受け継ぐ司祭職とキリストの司祭職との関係を伝えています。著者はメルキセデクの司祭職に触れていますが、それは神の摂理によってアブラハムの時代からすでに神の民の使命のうちに刻まれていた前兆、すなわちメルキセデクの姿と関連して告げられていた予告が、イエズス・キリストのうちに実現したことを伝えるためでありました。そこでキリストについて次のように記されています。「完全なものとされて、御自分に服従するすべての人の永遠の救いのもととなられ、そして神によってメルキセデクの位に等しい大司祭と宣言された。」（ヘブライ 5・9～10）さらに、創世の書の中のメルキセデクについて語られていることを思い出させながら次のように続きます。「その名の示すとおり（メルキセデクは）まず正義の王であり、次にサレムの王すなわち平和の王である。彼には父もなく、系図もなく、日々の始まりもなく命の終りもない。彼は神の子になぞられた永遠の司祭である」と。（同 7・2～3）

礼拝の儀式と契約の櫃、旧約の種々の犠牲の類比を使うヘブライ人への手紙の著者は、イエズス・キリストを「天のものの写しであり影でもある」旧約のすべての表象と約束の実現として表しています。ところで、憐れみ深く忠実な大司祭キリストは「永久にとどまり、変わることをない司祭職を保ち」「汚れのない御自分を神に捧げられ」たのです。（同 8・5、2・17、3・2～5 参照、7・24、9・14）

深い感銘を誘うこのヘブライ人への手紙は何節か引用する価値があるでしょう。イエズス・キリストは世に入るとき御父に仰せになりました。「あなたは犠牲も供え物も望まれず、ただ私のために体を準備された。あなたは燔祭と罪償の犠牲を喜ばれなかった。そこで私は〈神よ、私は御身の御旨を行なうために来る〉と言った。」「こういう大司祭こそ私たちのために必要であった。」「そこで、キリストは神への奉仕において憐れみ深い忠実な大司祭となり、人々の罪を償うために、すべてにおいて兄弟に似た者となられるはずであった。」キリストは罪を除いてすべてを私たちと同様に味わわれ、私たちの弱さに同情される大司祭でした。（同 10・5～7、7・26、2・17、4・15 参照）

そしてさらに続きます。「キリストは他の大司祭のように、日々まず自分の罪のため、次に民の罪のために犠牲を捧げる必要はない。なぜなら御自分を捧げて、一度で永久にそれを成し遂げられたからである。」「キリストは将来の恵みの大司祭として来られたのであって…自分自身の血をもって、ただ一度だけで永久に至聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられた。」「永遠の霊によって、汚れのない御自分を神に捧げられたキリストの御血が、私たちの良心を死のわざから清めて、生きる神に奉仕させる。」（同 7・27、9・11～12、14）

キリストは永遠の救いの力をもった司祭です。「御自分によって神に近づく者のために取り次ごうとして常に生き、その人々を完全に救われる」御方なのです。（同 7・25）

最後に注目すべきは、神の啓示によってメシアの伝承が含むすべてのことを、イエズス・キリストはその全生命をかけて、特に十字架の犠牲のうちに実現なされたことが、ヘブライ人への手紙の中にはっきりと明記されている点です。キリストの司祭職は、旧約の祭司たちの儀式上の奉仕に関連していますが、さらに司祭として、またいけにえとして、

それを越えたものです。契約の歴史における司祭職に備えられた神の永遠の計画が、キリストにおいて実現したからです。

ヘブライ人への手紙によれば、メシアの職務はメルキセデクの姿に象徴されていることがわかります。すなわち「メルキセデクのような他の司祭が立てば、以上述べたことがもっと明らかになる。その人が司祭と立てられたのは、肉の掟の律法によるのではなく、不朽の命の力によってである。」つまりそれは、永遠の司祭職なのです。（同 7・15、3～24 参照）

新約聖書の忠実な保護者であり解説者である教会は、エフェゾの公会議（431 年）やトリエント公会議（1562 年）、そして第二バチカン公会議（1962～65 年）によって証言されているように、キリストがメシア・司祭であるという真理を繰り返し確言してきました。

この真理の証は御聖体の犠牲のうちに見ることができます。すなわち、教会がメルキセデクにならない、日々、捧げる聖体祭儀が、この点を明らかに証言しているのです。

《キリスト 救い主・預言者》

ピラトの前で行なわれた取り調べで、あなたは王かと尋ねられたイエズスは、地上的・政治的な意味の王ではないと否定なさいました。しかし二度目に尋ねられた時には「あなたの言うとおりに私は王である。私は真理を証明するために生まれ、そのためにこの世に来た」とお答えになりました。（ヨハネ 18・37）ここでメシアの王として、そして司祭としての使命が、預言者としての使命の本質的性格とつながり合います。事実、預言者は真理を証言するために遣わされました。そして真理を証言するために、神の御名をもって語ります。ある意味で預言者は神の声であると言えます。イスラエル人のために神から遣わされた預言者の使命は神の御名で語ることでした。

〈預言者の性格〉が〈主の使命〉と一致していることは、特に王であり預言者であるダビドの姿のうち認めることができます。

神と人々に仕える

旧約の預言者の歴史がはっきりと語っているように、神の御名をもって語り、真理をのべ伝えるということは、命令をお与えになる神と、神の使者として預言者が語りかける人間への奉仕でした。この預言者の奉仕は〈崇高で栄誉あること〉でしたが、その反面〈困難で苦しいこと〉でもありました。エレミアの痛ましい生涯はそのよい例といえましょう。彼は妨害、拒絶、迫害に遭いました。〈真理〉を宣言すればするほど、人々からは〈受け入れてもらえなかった〉のです。イエズスは、預言者たちが受けた苦しみに言及なさいましたが、御自らそれらを体験なさいました。

預言者の使命が備える司祭的な性格については先に述べてきましたが、次に神のしもべ（エベッド・ヤーウェ）の姿について考えてみましょう。これはイザヤの書（正確には「デウテロ・イザヤ書」）に描かれています。預言者の性格をはっきりと表しているこの「ヤーウェのしもべ」という表現は、同時に司祭として、また王としての特色をはっきりと表わしています。このことを考えれば、旧約のメシアの伝承がこの主のしもべの姿のうち豊

かに意味深く表現されていることに気づきます。イザヤの書に記された〈しもべの歌〉は、旧約のメシア観を総合したものですが、それはまた、将来発展する可能性を残したものです。キリストよりずっと以前に書かれたものであるにも拘わらず、〈ヤーウェー苦しむしもべ〉の描写を見れば、それがキリストを指していることはすぐにわかります。その描写は実に正確忠実で、キリストの受難をもとに描かれたかと思えるほどです。

「しもべ」「神のしもべ」という言葉は、旧約聖書に広く使われています。数多くの崇高な人物が〈主のしもべ〉と呼ばれ、またそのように認められてきました。たとえばアブラハム、ヤコブ、モーゼ、ダビド、ソロモン、預言者たちなどです。（創世 26・26、32・11） またナブコドノゾルやキロのようなイスラエルの歴史においてそれぞれの役割を果たした異教徒にもこの呼び名が与えられています。（エレミア 25・8～9、イザヤ 44・26）そして全イスラエルも一つの民として〈主のしもべ〉と呼ばれています。（イザヤ 41・8～9、42・19、44・21、48・20 参照） 「主は、しもべイスラエルを助けられました」と聖母マリアが神を賛美するマニフィカトの中にも、この表現が見られます。（ルカ 1・54）

しかしイザヤ書にある〈しもべの歌〉について言えば、イザヤがはっきり罪人イスラエルと区別していますが、これは一つの民といった集合的なものではなく、一人の人間を表しています。第一の歌は次のように語っています。「私の支えるしもべ、私の心を喜ばせる、選ばれた者、私は彼のうちに霊を置き、異国に公正を宣言させる。彼は叫ばず、声を立てず、広場で話を聞かせない。彼は折れかけたあしを折らず、弱い炎の灯芯を消さず…弱らず、くじけず、この世に公正を立てるときまで。」 「主なる私は…民の契約と定め、異国の光とした。おまえは盲人の目を開き、囚人を牢から出し、闇に住むものを獄から出す。」（イザヤ 42・1～4、6～7）

第二の歌も同じ内容を展開しています。「島々よ、聞け、遠いところの諸々の民よ、心せよ、主は母のふところから私を呼び、母のふところから私の名を記憶された。彼は私の口を鋭い剣のようにし、御手のかげに隠し、私をとがった矢とし、えびらにさし…」 「こう仰せられた、おまえがヤコブ族を立て直し…私のしもべとなさるのは、あまりにもささいなことすぎる。私は、おまえを国々の光とし、地の果てまで救いをもって行かせよう。」 「落胆する者を一言で支えられるように、主なる神は私に弟子の舌を与えられた。」 「多くの民は驚き、王たちは、彼の前に口を閉じる。」 「正しいしもべは、その苦しみによって多くの人々を義とし、その罪を自ら背負う。」（同 49・1～2、6、50・4、52・15、53・11）

あとにあげた三つの引用は第三と第四の歌からのものですが、これは 極めて現実的に〈苦しむしもべ〉の姿を表しています。この苦しむしもべについては後に述べようと思えます。驚くべきことですが、イザヤはイエズスの御生涯のはじめに聖なる老人シメオンが預言したすべてのことを、すでに預言していたのです。シメオンはイエズスを「異邦人を照らす光」として、また同時に「逆らいのしるし」として挨拶しました。（ルカ 2・32～34 参照） イザヤの書を読むうちに、真理を証明するためこの世に来たにも拘わらず、まさにその〈真理のために人々から拒まれ〉死によって「多くの人」の義のもととなられた預言者としてのメシアの姿が浮かんできます。

新約聖書には、イエズスのメシアとしてのお働きの始めから、いたるところでヤーウェ・主のしもべの歌が繰り返されています。ヨルダン川での洗礼の場面は、イザヤの書と並行して次のように展開します。まずマテオが記しています。「イエズスは洗礼を受けられた。…すると天が開け、神の霊が鳩の形で彼の上に下るのを見た。」一方イザヤはこう語ります。「私は彼のうちに霊を置いた。」そしてマテオが付け加えて「天から『これは私が喜びとするいとし子である』と言う声がした。」イザヤは、神がしもべに「私の心を喜ばせる選ばれた者」と仰せになったと記しています。(マテオ 3・16~17、イザヤ 42・1) ヨルダン川に近づいて来られるイエズスを指して洗礼者ヨハネは、「世の罪を取り除く神の小羊を見よ！」と叫びますが、これは苦しむヤーウェのしもべの第三と第四の歌を一言で言い尽す歓喜の叫びです。(ヨハネ 1・29)

ナザレトの会堂でイエズスがお話しになった、最初のメシアとしての御言葉をルカが記していますが、そこでも同様のことが見られます。イエズスはイザヤの書をお読みになりました。「主の霊は私の上にある。私に油を注いで聖別されたからである。霊は、貧しい人々に良い便りをもたらし、捕われ人に解放を、盲人に見えることを告げ、しいたげられた人に自由を返し、主の恩寵の年をのべ伝えるために、私を遣わされた。」(ルカ 4・17~19) これは主のしもべの第一の歌にあるとおりです。(イザヤ 42・1~7、61・1~2 参照)

イエズスの御生涯とその御働きを見れば、イエズスがまさに神のしもべとして私たちの目に映ります。人々に救いをもたらす御方、人々を癒す御方、人々を罪から解放される御方、力によってではなく、善によって人々を御自分のもとにお集めになる御方です。福音書、特にマテオの福音書にはイザヤの書がよく引用されていますが、マテオが記すようにイザヤの預言はキリストの内に実現したのです。「夕暮れ時になると、人々が悪魔つきを大勢連れてきたので、一言で悪霊を追い出し、病人を治された。こうして預言者イザヤのことばは実現した『彼はわれわれのわずらいを取り去り、われわれの病気を背負った。』」(マテオ 8・16~17、イザヤ 53・4 参照) また次のようにも記しています。「多くの人々がイエズスについてきたので、イエズスはその人たちをみな治した。…こうして預言者イザヤの預言は実現した。『私の選んだしもべ、私の喜びとする愛する者、私は彼の上に霊を置こう。』」(マテオ 12・15~21) そしてこの後に主のしもべの第一の歌が続きます。

福音書と同様に使徒行録も伝えていますが、キリストの十二人の弟子からはじまる初代の弟子たちは、預言者イザヤがその霊に満ちた歌の中で預言したすべてのことがイエズスのうちに実現したことを確信しました。すなわちイエズスが選ばれた神のしもべであること。(使徒行録 3・13、26、4・27、30、ペトロ①2・22~25) ヤーウェのしもべの使命を実現し、新しい律法をもたらされたこと、すべての国々の光となられたことを確信したのです。(使徒行録 13・46~47) この同じ確信は、後に「ディダケー」(使徒の教え)や「聖ポリカルポ殉教録」、ローマの聖クレメントの第一の手紙に見つけることができます。

ここでとても重要なことを付け加えなければなりません。イエズスがイザヤ書の 53 章に言及して、御自らしもべであると仰せになったことです。「人の子が来たのは仕えられる

ためではなくて仕えるためであり、多くの人のあがないとして自分の命を与えるためである。」（マルコ 10・45、マテオ 20・28） 弟子の足を洗ったときも同じ考えをお示しになりました。（ヨハネ 13・3～4、12～15）

新約聖書全体にわたって、しもべの召し出し、人々の解放、治癒、契約という預言者の使命を強調するヤーウエのしもべの第一の歌への言及がありますが、同時に、実に多くのテキストが、苦しむしもべの第三と第四の歌を引用しています。（イザヤ 50・4、11、52・13～53・12） 同じことがフィリッピ人への手紙に出てきます。聖パウロはキリストを賛美する歌を歌って次のように要約しています。「キリストは本性として神であったが、神と等しいことを固持しようとせず、かえって奴隷の姿をとり、人間に似たものとなって、自分自身を無とされた。…死ぬまで…自分を卑しくして従われた。」（フィリッピ 2・6～8）

《イエズス・キリスト 預言の成就》

メシアについての真理が旧約聖書においてすでに預言されていたこと、そしてそれが、神の啓示の新しい段階へと移ったナザレトのイエズスの時代の人々に継承されていったことなど、とても重要な点を前回から述べてきました。イエズスに従った当時の人々が真理を受け入れたのは、イエズスの内にメシアの真理が実現し、イエズスこそ真のメシア・キリストであることを認めたからでした。イエズスに召された最初の弟子アンドレアは、「メシア—キリストの意味—に会った」と兄弟シモンに告げました。これは実に意味深い言葉です。（ヨハネ 1・42）

しかし福音書においてこれほどはっきりと表現されているのは、むしろめずらしいことです。「イエズスが行なわれ、また教えられた。」（使徒行録 1・1） どのようなことにも、人々は驚きと感嘆を示していました。しかし当時のユダヤ社会に広がっていた救い主のイメージは、イエズスの姿とお働きにはそぐわないものでしたから、イエズスは同一視されるのを避けられたのです。

イエズスこそ世の罪を取り除く〈神の小羊〉であることを認め、ヨルダン川のほとりでイエズスを指して「来たるべき御方」と言った洗礼者ヨハネ、そしてその御方こそ聖霊の御力で「新しい洗礼」を授けられる御方であることを宣言した洗礼者ヨハネが弟子を送って「来たるべき御方はあなたですか、それとも他の人を待たねばなりませんか」と尋ねさせたことを思い出します。（ヨハネ 1・15 参照、マテオ 11・2）

イエズスはヨハネの使いに次のようにお答えになりました。「あなたの見聞きしたことをヨハネに知らせに行け。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人は治り、耳の聞こえぬ者は聞こえ、死人はよみがえり、貧しい人には福音が告げられている。」（ルカ 7・22） このようにイザヤの書を引用し、救い主としての使命を知らせようとなさいました。（イザヤ 35・4～5、61・1 参照） そして「私につまずかぬ者は幸いである」と最後に仰せられました。（ルカ 7・23） この御言葉は、尊い先駆者、洗礼者ヨハネに直接向けられているようです。洗礼者ヨハネはメシアについて異なった考えをもっていました。

事実、ヨハネはその教えの中でメシアの姿を厳しい裁判官の姿として伝えていました。

「近く来るお怒り」とか「良い実をつけぬ木」をすべて切り倒すために「木の根におかれた斧」というような表現を用いて話をしていたのです。(ルカ 3・7～9) 確かにイエズスは、必要な時にははっきりとまた厳しく、神の御言葉に対する逆らいや頑固な態度に触れられることもありましたが、むしろ貧しい者に福音を告げる御方であり、御働きと奇跡によって慈悲深い父なる神の救いの聖旨を明かす御方だったのです。

イエズスのヨハネに対する答えには、もう一つの注目すべき要素が含まれています。つまり、イエズスご自身が救い主であることを公に宣言することをはばかれたということです。当時の社会的状況のもとでは、メシアという呼び名はとてもあいまいで、人々はそれを政治的にとらえていました。ですから、イエズスは説いて無理に信仰を引き起こすよりも、お働きによって証明する方を望まれたのです。

しかし、ヨハネの福音書に記されているサマリアの婦人との会話のような特別の場合もありました。「私はキリストと言われるメシアがおいでになることを知っています。その方が来ればすべてのことを知らせてくださるでしょう」と言った婦人にイエズスは、「あなたに話している私がそうだ」とお答えになりました。(ヨハネ 4・25～26)

会話の内容によって聞く用意ができていと判断されたイエズスは、サマリアの婦人にはっきりと確信をお与えになったのです。イエズスの御言葉を聞いて婦人は町に戻り、急いで人々に知らせます。「私がしたことを全部話した人がいます。見にいっちゃい。あの人はメシアではないでしょうか。」婦人の言葉に動かされて、多くのサマリア人がイエズスに会いに来ました。そしてイエズスの話を聞き、「本当に彼こそこの世の救い主だ」と確信しました。(同 4・28～29、42)

しかし、イエズスの御言葉と奇跡を見聞きしたエルサレムの住人たちの中には、救い主かどうか、疑問をもつ人々がありました。「私たちはこの人がどこから来たかを知っている。キリストが来るときはどこから来るかを知らないのだが」と言って、イエズスが救い主であることを認めようとしない者もいました。(ヨハネ 7・27) また「キリストが来られてもこの人がしたほどの奇跡をされるだろうか」と言う人もいました。(マテオ 12・23) ユダヤの議会は「もしイエズスをメシアだと宣言するものがあれば会堂から追放する」と決めていました。(ヨハネ 9・27)

こうして私たちは、フィリッポのカイザリアへ行かれる途中、弟子たちに話されたイエズスの御言葉の真の意味が理解できます。「イエズスは弟子たちに『みなは私のことを何者だと言っているか』と尋ねられたので、『洗礼者ヨハネあるいはエリア、ある人は預言者の一人だと言っています』と弟子たちは答えた。するとまた『ところであなたたちは何者だと思いか』と問われると、ペトロが『あなたはキリストです』と答えた。」つまり、メシアです、と。(マルコ 8・27～29、マテオ 16・13～16、ルカ 9・18～21)

マテオの福音書によれば、イエズスはこの答えをお聞きになって、ペトロが教会のかしらになることを宣言なさいました。(マテオ 16・18 参照) そしてペトロの答えの後でイエズスは、「私のことをだれにも言うな」と戒められました。(マルコ 8・30) 御自分が救い主であることを宣言なさらなかったばかりか、弟子たちにもイエズスが誰であることを公にすることをお望みにならなかったのです。イエズスの御働きを見て、そして教えを聞

いて人々が信じるようになることをお望みでした。「あなたはキリストです」とペトロが表明したことを、弟子たちもみな確信したのですが、それは、イエズスの御働きと御言葉が大きな基礎となり、その土台の上に救い主であるイエズスに対する信仰が築かれていたからでした。

師のお叱り

マルコとマテオの福音書に並行してあらわれる、この会話の意味深い展開を追っていくと、救い主としてのイエズスの聖心に気づきます。(マルコ 8・31～33、マテオ 16・21～23 参照) あたかも弟子たちが信仰告白したことと関連させるかのよう、イエズスは「人の子が多く、苦しみを受け、長老や司祭長や律法学士らに見捨てられ、ついに殺され、三日後によみがえることを弟子たちに教え始められた。」 「イエズスははっきりとそれを話された。」すると「ペトロはイエズスの袖を引いて諫め始めた。」「主よ、そんなことは起こりませんように」と。これをお聞きになったイエズスはペトロに言われた。「サタン引きさがれ！あなたが思っているのは神の考えではなく人間の考えだ。」(マルコ 8・31～33、マテオ 16・22～23)

イエズスのこの叱責を聞くと、救い主としての御働きの始めに荒野でお受けになった誘惑が聞こえてくるようです。(ルカ 4・1～13 参照) その時サタンは、イエズスが御父の聖旨を実現なさることを思いとどまらせようとしたのです。弟子たち、中でもペトロは「あなたはキリストです」とイエズスの救い主としての使命に対して信仰告白をしたにも拘わらず、救い主がこれから後、苦しみと死をお受けになることを認めることができず、人間的で現世的な救い主についての考えを捨てることもできなかつたのです。御昇天の時にも彼らは「あなたがイスラエルのために国を再興されるのはこのころですか」と尋ねました。(使徒行録 1・6)

このような姿勢をご覧になったとき、イエズスははっきりと厳しい態度を示されました。イエズスは救い主の使命がイザヤの書に記されている苦しむしもべの使命であること、それは特に次の引用箇所表れていることをご存じでした。「彼は、その御前でひこばえのように、荒地から出た根のように成長した。彼には…美しさも姿形もない。彼は、人から軽蔑され、捨てられた、苦しみの人、苦しみになれた人。その前では顔を覆いたくなる、そんな人のように、見下され、無視された人。実に、彼は私たちの労苦を背負い、私たちの苦しみを担った…彼は、私たちの罪のために突き刺され、悪のために押しつぶされた。」(イザヤ 53・2～5)

イエズスはメシアについての真理を守り、最後まで果たす覚悟をしておられました。それこそ神の聖旨であったからです。「正しいしもべは…多くの人を義とする。」(イザヤ 53・11) このように、イエズスは御自分と友をその出来事に向けて準備されました。〈救いの秘義〉の完全なる実現、つまり死と復活という過越へと準備されたのです。

《人の子 イエズス・キリスト》

〈人の子、そして神であるイエズス・キリスト〉 メシアについてずっと述べてきまし

たが、これはその究極のテーマとも言えるものです。そしてキリストの神性と人性という、キリスト教の啓示と信仰の土台をなす真理でもあります。これについては後にさらに詳しく述べることにします。これまで旧約聖書に記されたいくつかのメシアの呼び名について考えてきましたが、今回でそれを終えたいと思います。そしてそれぞれの呼び名を、イエズスがどのような意味で御自分を指すのにお使いになったかを考えてみましょう。

ダニエルの書から

まず〈人の子〉という称号ですが、人々がイエズスを〈神の子〉と呼んでいる間にも、イエズスが御自分を指して〈人の子〉という呼び名をお使いになったのは意義深いことです。石殺しにあう前の助祭ステファノがこの名を呼び、黙示録の著者が二つの章で使っているのを除けば、誰もイエズスをこの名で呼んだ者はなかったのですが、イエズスは御自分を〈人の子〉とお呼びになりました。（使徒行録7・56、黙示録1・13、14・14）

〈人の子〉という呼び名は旧約聖書のダニエルの書に記されています。次にあげるのは、預言者が夜に見た幻について描いた一節です。「私が夜の幻のうちに見ていると、天の雲とともに〈人の子のようなもの〉がきて、日の老いた者のもとに進み、その前に導かれた。彼には 権勢、威光、国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者が彼に仕えることとなった。その勢力は永遠のもので、過ぎ去ることがなく、その王国は滅びることがない。」（ダニエル7・13～14）

ダニエルがこの幻について説明を求めると、次の答えを受け取りました。「いと高き者の聖徒たちが、国を受け継いで、永遠に、代々限りなく保つ。…天下の国々の権威はいと高き者の聖徒の民に与えられる。」（ダニエル7・18、27）ダニエルの書は、一人の人とその民について語っています。ここで、マリアへのお告げの天使の言葉が人の子という人物について語っていることを思い出します。「その子は永遠に治め…その国は終ることがない。」（ルカ1・33）

イエズスが御自分のことを指して用いられた〈人の子〉という表現は、旧約聖書の正典の伝承に由来するものですが、ユダヤの經典外にもあります。そこで注意しなければならないのは〈人の子〉ben-adam という表現は、イエズスの時代のアラマイ語ではただ〈人〉bar ethas を意味するようになっていました。イエズスは御自分を〈人の子〉と呼ぶことで、その言葉がもつ普遍の意味の背後に、預言者の教えにある救い主の意味を隠すことができたのです。〈人の子〉についての記述は、特にキリストの地上での御生活と御受難の場面によく見られるのですが、キリストの最終的な栄光を表す場面においても見られることは、偶然ではないのです。

エゼキエルの予言

ナザレトのイエズスの地上での御生活について、次のような表現があります。「きつねには穴があり、空の鳥にはねぐらがあるが、人の子には枕するところもない。」「人の子が来て飲み食いすれば、〈大食漢、酒飲み、税吏と罪人の仲間だ〉と言う。」（マテオ8・20、11・19） また別の場面では、イエズスの御言葉は強くその御力を示しています。

「人の子はまた安息日の主でもある。」（マルコ 2・28） また屋根の穴から吊り下ろされた中風の人を癒される場面では、注目を促すような調子で仰せになっています。「人の子が地上で罪をゆるす権能をもっていることをあなたたちに知らせよう。」そして中風の人に向かい「私は命じる。起きよ、床をとって家に帰れ。」（マルコ 2・10～11） また、「ヨナがニネベの人のしるしになったように、人の子は今の代に対してしるしとなるのである」とも仰せになっています。（ルカ 11・30） 神秘で覆われた御言葉もあります。「あなたたちは、人の子の日々のただ一日でも見たいと思う時が来るだろう。だが見られまい。」（ルカ 17・22）

ある神学者たちは、エゼキエルの預言とイエズスの御言葉の間の興味深い一致に注目しています。神は「仰せられた、〈人の子よ、私はおまえをイスラエル人におくる…彼らは私に背き…彼らに言え、主は仰せられる。〉」「人の子よ、…見る目があっても見ず、聞く耳があっても聞かない反逆の徒の中に、おまえは住んでいる。」「人の子よ、イスラエルの家に寓話をいい、たとえ話を語れ。」（エゼキエル 2・3～4、12・2、17・2）

預言者の言葉をそのまま繰り返しながらイエズスは教えられました。「人の子は見失ったものを尋ねて救うために来た。」（ルカ 19・10） 「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、多くの人のあがないとして自分の命を与えるためである。」（マルコ 1・45、マテオ 20・28） 「人の子もまた御父の栄光をもって下り来るその時」人の子とその言葉を恥じる者を、恥じることでしょう。（マルコ 8・39 参照）

神の国の使者、そして人々を回心へと招く預言者という二重の観点から見ると、〈人の子〉の姿は神の代理人と映じてきます。さらに御父の聖旨に従い、人々を贖い救うために苦しみと地上的条件を味わわれた御方、人々の〈代理人〉ということにもなります。イエズスはニコデモにお話しになりました。「モーゼが荒野でへびを上げたように、人の子も上げられねばならぬ。それは、信じるすべての人が、彼によって永遠の命を得るためである。」（ヨハネ 3・14～15）

御受難について繰り返しはっきりとお話しになりました。「それから人の子が多くの苦しみを受け、長老や司祭長や律法学士らに見捨てられ、ついに殺され、三日後によみがえることを弟子たちに教え始められた。」（マルコ 8・31） マルコの福音には、三度に渡って御受難について予告なされたことが記されています。（同 9・31、10・33～34 参照）どの場面でもイエズスは御自分を〈人の子〉と呼んでおられます。

十字架上の辱め

カヤファの裁きの席でも、この表現を用いておられます。「おまえはキリストか、祝されたものの子か」と尋ねられて、「その通りである。あなたたちは〈人の子〉が力あるものの右に座し、天の雲に乗り来るのを見る」とお答えになりました。（マルコ 14・62）これはダニエルの預言のこだまといえます。「天の雲とともに、人の子のようなものが来る。（ダニエル 7・13） また神の右に座したもう主を見ることを歌った詩篇にも繰り返されています。（詩篇 09・1 参照）

イエズスは何度も〈人の子〉が上げられることをお話しになりましたが、それが十字架

の屈辱を通してであることを聞く者に隠されませんでした。イエズスがほのめかされた悲劇的な摂理をよく理解しながらも、「あなたはどのようにして人の子が上げられるとおっしゃるのですか。その人の子とは誰ですか」と人々や弟子たちは尋ねました。このような反対と不信をご覧になって、イエズスはお答えになりました。「あなたたちが人の子を上げてのち、私が〈それ〉だったと知り、私が自分では何事もせず、ただ御父に教えられたとお話しただのと知るだろう。」十字架に〈上げられる〉ことはすなわち栄光をもたらすことである、と断言なさいました。さらに、「人の子が栄光を受ける時が来た」とも言われます。ユダが高間から出て行った後のイエズスの御言葉はとても重要です。「今や人の子は光栄を受けた。人の子によって神が光栄を受けたもうた。」（ヨハネ 12・34、8・28、12・23、13・31）

ダニエルが素描した生涯、受難、死、そして栄光の意味することがこの言葉によってわかります。またイエズスは、ダニエルが人の子のみわざに帰した永遠で果てしない王権を、御自分のもとのして表明なさいました。世の終りの預言の中で「人の子が大いなる勢力と栄光を帯びて雲に乗り下るのを見るだろう」と宣言しておられます。（マルコ 13・26、マテオ 24・30 参照）世の終りをこのように展望してこそ、福音を伝えるという教会の仕事が所を得るのです。イエズスは「あなたたちがイスラエルの町々を回り尽くすまでに人の子は来る」と教えられます。（マテオ 10・23）そして御自らに問われました。「人の子の来るとき、地上に信仰を見出すだろうか。」（ルカ 18・8）

〈人の子〉としてイエズスは御生涯、受難、死と復活によって旧約に記された救いの計画を実現し、同時にこの名のもとで人々の間の真の人間として、ナザレトのマリアの子として、その役割を果たされました。人の子の母であるこの婦人によって、〈神の子〉は同時に〈人の子〉でもありました。ヘブライ人への手紙が証言しているように、真の人間であらせられたのです。「罪を除いてすべてを私たちと同様に味わわれた。」（ヘブライ 4・15、『現代世界憲章』22 参照）

《イエズス・キリスト 真の神・真の人》

「われは信ず、聖霊によりてやどり、童貞マリアより生まれたもうた神の御独り子、われらの主イエズス・キリストを。」使徒信経が宣言するこの真理を考察してきました。キリストが真の神・御父の子であり、真の人間・処女マリアの子でもあるという真理です。前回までは、信仰の土台をなすこの真理についていろいろな観点から見てきたのですが、今回はさらにその本質的要素に関して理解を深めましょう。〈真の神であり真の人である〉ことの意味を探るのですが、これはイエズス・キリストにおいて神が御自ら啓示してくださった真理です。他のすべての啓示された真理と同様に、この真理が理解できるのは信仰によってのみです。私たちは信仰が理性にかなうものであることを知っています。これから信仰を強めるために、神であり、人間である御方の秘義についてよく考えてみたいと思います。

前にも述べましたが、イエズス・キリストはよく御自分を指して〈人の子〉という表現をお使いになりました。（マテオ 16・28、マルコ 2・28 参照）この称号は旧約の救い主

の伝承に由来するものですが、それは同時にイエズスのお望みである〈信仰を伝える〉という目的に役立つものでした。イエズスは、弟子や聴衆みずからが、人の子が真の神の子であることに気づいてほしいとお望みでした。前にも述べたように、フィリッポのカイザリア地方でのペトロの信仰告白の中にはこれがよく表れています。イエズスが弟子たちに問われると、ペトロはイエズスが神であることをはっきりと認めました。そこでイエズスはペトロを「幸いな人」と呼び、その答えが「血肉からのものではなく」「天にまします父」によるものであると仰せになって、ペトロの証言を確認なさいました。（マテオ 16・17 参照） 子であると宣言するのは御父です。御父だけが御子をご存じなのでから。（同 11・27 参照）

このように、イエズスは慎重に真理を明かしてゆかれたのですが、神の子についての真理は、イエズスの言葉とみわざの光を受けて徐々に明らかになっていきました。しかしある人々にとってはそれが信仰の対象となり、他の人々にとっては矛盾となり非難の対象となりました。この点があらわになったのは、取り調べのときでした。マルコの福音書をみましょう。「大祭司は『おまえはキリストか、祝されたものの子か』と尋ねた。イエズスは、『そのとおりである。あなたたちは人の子が力あるものの右に座し、天の雲に乗り来るのを見る』と言われた。」（マルコ 14・61～62） またルカの福音書では、次のようになっています。「『するとあなたは神の子ですか』と言ったので、イエズスは『その通り、私がそれだ』と答えられた。」（ルカ 22・70）

この答えに対する反応は一致していました。「この男は冒瀆を吐いた。…みなも今冒瀆のことばを聞いた。…この男は死に値する。」（マテオ 26・65～66） いわゆる旧約の律法の現世的解釈から起こる非難でした。

「主の名を汚す者は、死罪に当たる。集団はみんなで、その者を石殺しにする」と、レビの書にはっきりと記されています。（レビ 24・16） ナザレトのイエズスは、旧約の代行者の前で真の神の子であることを宣言なさったのです。それは、彼らの信じるところによれば、冒瀆に相当することでした。こうして「彼は死罪に当たる」と宣告され、判決が執行されました。旧約の掟による石殺しの刑ではなく、ローマの法律による十字架の刑でした。イエズス御自らが〈神の子〉であると表明することは、神であると宣言することであり、旧約の唯一の神を信じている人々のうちに徹底的な反対を引き起こす結果となったのです。（ヨハネ 10・33 参照）

イエズスに対して、結局最後に法的訴訟が起こされたのですが、それは福音書、特にヨハネの福音書に記されているように、あらかじめ予期されていたことでした。イエズスの話を聞いた聴衆が、冒瀆に当たるとしてイエズスを石殺しにしようとする場面が幾つか記されていますし、また良い牧者の章では、イエズスの御言葉が冒瀆と解釈されたことが記されています。「私と父とは一つである」とイエズスが仰せになると「ユダヤ人たちはふたたび石を取り上げてイエズスを殺そうとした。イエズスは『私は父から来る多くの善い行ないを見せたが、それらのどの行ないのために石殺しにしようとするのか』と尋ねられた。ユダヤ人たちは『石殺しにするのは善い行ないのためではない。冒瀆のためだ。人間なのに神と名のるからだ』と答えた。」（同 10・27～29、30～33）

「アブラハムが存在する以前に私は存在する」という言葉に対しても同じでした。この時イエズスは、非難とも言える質問を突き付けられました。「あなたは自分を何者だと思っているのか。」この質問に対する返答は石殺しの刑に相当するおそれがあるのです。

(同 8・58、53、59 参照) イエズスは御自分を〈人の子〉と称されましたが、そのみわざと教えは、イエズスが神の子であることを証明するものでした。すなわち、神なる父と一体である御子は、また神であることを証明するものでした。しかしこのように証明された明白な真理の受け取り方は、二つに分かれました。ある人々はイエズスを認め受け入れました。「多くの人が彼を信じた。」(同 8・30 他) しかし驚いたことに、他の人々は激しく反対し、旧約の律法にのっとり冒瀆の罪で訴えたのです。

「私は存在するものである」の意味

キリストがはっきりと仰せになった「私は存在する」という御言葉は特に意味深いもので、汝の名は何かと尋ねたモーゼの問いに自らお答えになった神の御言葉に結びつくものです。「私は〈在すもの〉(存在するもの)である。…イスラエルの民にこう言え、『〈在すもの〉(存在するもの)が、私をおまえたちにお遣わしになったのだ』と。」(脱出 3・14) 「私は存在する」という同じ表現を、キリストはとても重要な意味でお使いになりました。例えば「アブラハムが存在する以前に私は存在する」と言われたように。また次のようにも言われました。「もし私がそれだと信じないなら、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬ。」(ヨハネ 8・24) 「あなたたちが人の子を上げてのち、私が〈それ〉だったと知る。」「今から、そのことの起こる前に私はこう言う。そのことが起るとき、私が何者であるかをあなたたちに信じさせるためである。」(同 13・19)

他の共観福音書にも「私は存在する」という表現が見られます。(マテオ 28・20、ルカ 24・39 参照) けれども、ここにあげた引用の中で、神の御名が用いられていることは、脱出の書が記すように明白です。キリストは十字架に〈上げられること〉とその後の復活について語る時「私が〈それ〉だったと知る」と言われました。実は、神の御名がキリストに帰するものであることがいづれ明らかになるだろうと言っておられたのです。この表現を用いてイエズスは真の神であることを宣言なさいました。受難の前に「私のものはみなあなたのもの、あなたのものはみな私のものです」と御父に祈られました。(ヨハネ 17・10) これはつまり「私と父とは一つである」ことを表していたのです。(同 10・30)

託身(受肉)された神のみことばであるキリストの御前で、ペトロと共にあの信仰の喜びを繰り返しましょう。「あなたはキリスト、生ける神の子です。」(マテオ 16・16)

《奇跡 その事実と意義》

聖霊降臨の日、聖霊の御力と光を受けてペトロは、十字架につけられてのち復活なさったキリストについて、勇敢にもはっきりと証言しました。「イスラエルの人々よ、聞きなさい。…神はイエズスによって、あなたたちの中で奇跡と不思議とするしを行ない、それによってナザレト人のイエズスを証明されました。…あなたたちは彼を…はりつけにして殺したのです。だが、神は死の束縛を解き、彼をよみがえらせました。」(使徒行録 2・

22～24)

ペトロの証言は、神が「奇跡と不思議としるし」をもって称賛された、救い主としてのナザレトのイエズスの働きを要約したものといえます。それは使徒団のかしらペトロ自身が私たちに伝えた、最初のキリスト教カテケージスのあらましです。

二千年近くたった今、聖霊降臨の日に、ペトロの後継者である私はイエズス・キリストについての考察を進展させ、使徒の最初のカテケージスの内容について話さなければなりません。これまで〈人の子〉について述べてきました。イエズスは、人の子が神の子であり、御子と御父が一つであることを御教えによって知らせようとなされたのですが、その御教えには「奇跡と不思議としるし」が伴っていました。（ヨハネ 10・30 参照） 「奇跡と不思議としるし」は、キリストの教えの信実性を確かなものとするため、教えの後に行なわれただけでなく、使徒行録に「イエズスははじめから行ない、また教えられたすべてのこと」と記されているように、教えに先立つこともありました。（使徒行録 1・1） みわぎ、特に「不思議としるし」は、「神の国が近づいた」（マルコ 1・15）こと、そしてイエズスによって神の国が人類の歴史に入り、すべての人々のうちに入るべきものとなったことを明らかにし、不思議を行なう御方が真の神の子であることを証明しました。そこで今回は、キリストが神の御子であるという前回の考察と関連して、キリストの奇跡としるしについて考えてみましょう。

目撃者の証言

聖霊降臨の日にペトロが明言した「不思議としるし」の意味を一つひとつ分析する前に、それらがキリストを目撃した人たちの証言として福音書の重要な内容となっていることに注目すべきです。福音書から奇跡を取り除くことは不可能です。聖書のテキストだけでなく、テキストの前後関係を分析すると、奇跡が〈史実〉である、すなわち、それらが実際に起こったことであり、現にキリストのみわぎによるものであることを証明しています。知的誠意と科学的知識をもって問題を考えれば、奇跡の部分は後世に追加された箇所であるなどと簡単に結論づけることは誰にもできません。

この点については、これらの出来事がイエズスの使徒や弟子たちによって証明され語られただけでなく、多くの場合、イエズスに反対する人々からも認められていたことに注目すべきでしょう。例えば、反対する人々がイエズスの行なわれた奇跡の現実性を否定していないという事実は注目に値します。反対者は「彼はベルゼブルにとりつかれた」「悪魔のかしらによって悪魔を追い出す」などと言い、それがサタンの力によるものであると決めつけたのです。（マルコ 3・22、マテオ 8・32、12・24、ルカ 11・14～15 参照） しかしイエズスは、はっきりと彼らの矛盾を指摘なさいました。「サタンが自分に対して立ち上がって分かれ争えば、立てるどころか滅びてしまう。」（マルコ 3・26） ここで最も大切なことは、イエズスに反対する人々でさえ、イエズスの行なわれた「奇跡と不思議としるし」が現実であること、また本当に起こったという事実を、否定できなかったことです。

イエズスが安息日に病人を癒すかどうかを見て、旧約の律法に違反したかどで訴えよう

とした反対者たちの態度も、この間の事情を物語っています。例えば手なえの人の場面がそうです。(マルコ 3・1~2)

次に反対する者へではなく、洗礼者ヨハネから送られた使者へのイエズスのお答えを考えてみましょう。「来るべきお方はあなたですか、それとも他の人を待たねばなりませんか」と尋ねると、イエズスはお答えになりました。「自分の目で見聞きしたことをヨハネに伝えに行け。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人は治り、耳の聞こえぬ者は聞こえ、死人はよみがえり、貧しい人には福音が告げられている。」(マルコ 11・3~5) イエズスのお答えは未来のメシアについてのイザヤの預言にふれたもので、イスラエルと人類の刷新および精神的治癒という意味で理解されるものですが、イエズスは一般に知られていること、そしてキリストが救い主であるしるしとして弟子が洗礼者ヨハネに報告できる事実を語られたのです。(イザヤ 35・5~6 参照)

ペトロが聖霊降臨の日に述べた「奇跡と不思議としるし」については、すべての福音史家が記しています。共観福音史家はたくさんの出来事の一つひとつ記していますが、ときには、すべてを要約するがごとき一般的な表現をも用いています。マルコの福音書には次のように記されています。「イエズスは病人を数多く治し、多くの悪魔を追い出された。」(マルコ 1・34) マテオとルカの福音書では「民の中のすべての病、すべてのわずらいを治された。」「イエズスから力が出てすべての人を治す。」(マルコ 4・23、ルカ 6・19) イエズスが、いかに多くの奇跡を行なわれたかがわかります。ヨハネの福音書には同じような表現はありませんが、「しるし」と呼ぶ七つの出来事が詳しく記されています。なぜ「しるし」を使ったのか? ヨハネは、それらの出来事の最も本質的なもの、すなわちイエズスにおける神のみわざのあらわれを特に示したかったからです。「奇跡」という言葉を使えば、それを見聞きした人々に、出来事の〈異常な〉面に注目させてしまうのではないかと考えたのです。しかしヨハネは、福音書をしめくくる前に次のことをも記しています。「イエズスは弟子たちの前で、この本には記さなかったほかの多くのしるしを行なわれた。」(ヨハネ 20・30) そして、なぜそれらを選んだか理由を述べています。「これらのことを記したのは、イエズスが神の子キリストであることをあなたたちに信じさせるため、そして信じてその御名によって生命を得るためである。」(ヨハネ 20・31) これが共観福音書と第四福音書が共に目指すところです。すなわち、奇跡によって神の御子についての真理を示し、救いの始まりである信仰へと導くこと。

使徒ペトロが聖霊降臨の日に、「奇跡と不思議としるし」を通して証明されたナザレトのイエズスの全使命の証人となった時、ペトロはその同じイエズスが十字架につけられたことを思い起こさずにはいられませんでした。(使徒行録 2・22~24) そこでペトロは、人類の歴史における神の救いと贖いの完全なしるしである過越の出来事の証人となりました。このしるしには、十字架上の死という〈反奇跡〉と、復活という〈奇跡〉〈奇跡の中の奇跡〉が含まれていました。ともに一つの秘義に根ざしたものです。そこに私たち人間はイエズス・キリストにおける神のあらわれを深奥まで見極めることができ、信仰によって救いの道にあずかることができるのです。

《不思議としるし》

イエズス・キリストの使命が真実であることを証明するために神がお示しになり、聖霊降臨の日にエルサレムでペトロが証言した「奇跡と不思議としるし」を注意深く考えてみると、イエズスは神としての力を自覚し、御父と一体であることを意識しつつ、自らの名によって〈奇跡的なし

るし〉をなされたことがわかります。そこには常に「人の子—神の子」の秘義が現れています。その本質は、（主が自由な選択によってお受けになった）人間としての限界や人間が成しうることを遥かに越えたものでした。

福音史家の記す一つひとつの出来事の中に、神の秘義の存在を垣間見ることができます。イエズス・キリストはその御名によって奇跡を行なわれました。例えば「お望みになれば私を治してくださることもできます」というらい病人の懇願を受けて、人として「あわれに思い」次に神として「私は望む、治れ」と命じると、すぐにらい病は消え、「その人は治った」のです。（マルコ 1・40～42）屋根に穴をあけて吊り降ろされた中風の人の場合も同じでした。「私は命じる。起きよ、床をとって家に帰れ」と。（同 2・1～12 参照）

ヤイロの娘の場合もそうでした。「イエズスは子供の手を取り、『タリタ・クム』と言われた。それは『娘よ、私は命じる。起きよ』という意味である。すると娘は起きて、歩き出した。」（マルコ 5・41～42）またナインの死んだ息子のときにもイエズスは、「『若者よ、私は言う。起きよ』と言われた。すると死人は起き直り、ものを言い始めた。」（ルカ 7・14～15）

数多くのエピソードを見ていると、イエズスのどの言葉にも意志と御力が現れています。イエズスはそれを内に求め、いわば自然に表現されたのです。人々を治す力、死人をよみがえらせる力が神としての本性から出るものであることを示すかのように。

ヨハネが記すラザロのよみがえりの様子は特に注目すべきものです。「イエズスは目を上げて話された。『父よ、私の願いを聞き入れてくださったことを感謝いたします。私はあなたが常に私の願いを聞き入れてくださることをよく知っています。私がこう言いますのは、この回りにいる人々のため、あなたが私を遣わされたことを、この人たちに信じさせるためであります。』

そう言ったのち、声高く『ラザロ、外に出なさい』と呼ばれた。すると死者は…出てきた。」（ヨハネ 11・41～44）イエズスが自らの力を使って、御父との親密な一致のうちに友人ラザロをよみがえらせたことが強調されています。「私の父は今日も働かれるのだから私も働く」という言葉をここで確認できるのです。（同 5・17）高間での最後の晩餐のとき、イエズスは御父との関係、すなわち御父と一体であることを弟子たちにお話しになりますが、それがすでに表明されていたとも言えるのです。

イエズス・キリストのうちに働く神としての御力は、人間世界を越えて広がり、自然の力をも支配するものであることを福音はさまざまな奇跡—しるしを通して示しています。嵐が静められた場面は意味深い箇所です。「折りから激しい疾風が起こった」ので、恐れた弟子たちは眠っているイエズスを起こしました。「イエズスは…風を戒め、海に向かって『騒ぐな、静まれ』と言われた。そのとき風はやんで凧となった。…弟子たちは大いに

恐れ『これはだれだろう、風も海もこの人に従う』と言い合った。」（マルコ 4・37～41）

イエズスの御名によって

一連の出来事の中に、奇跡の大漁があります。いくら試みても何一つ獲れなかったのに、イエズスの命じた通りにすると大量の魚が網にかかりました。（ルカ 5・4～6、ヨハネ 21・3～6 参照） ガリラヤのカナで行なわれた「最初のしるし」もよく似ています。そのときイエズスは、給仕人に、水がめに水を満たしぶどう酒に変化した水を宴会係に持って行くようにお命じになりました。（ヨハネ 2・7～9） 奇跡の大漁もガリラヤのカナで起こったことも、漁師である弟子、婚宴での給仕人という人間がそれぞれの役割を果たしていますが、奇跡的な結果は人間からのものではなく、行動をお命じになった御方、神としての御力を持って御働きになった御方からのものでした。それは弟子たちの反応からも明らかです。弟子たち、中でも特にペトロは、奇跡の大漁を目のあたりにして「イエズスの足元にひれ伏し、『主よ、私から離れてください。私は罪人です』』と言いました。（ルカ 5・8） 神の秘義の翼に触れたと感じた時、ペトロのように、使徒たちも人々も心を動かされ、畏敬の念からくる恐れを抱いたのです。

聖霊降臨の後、「使徒たちの行なう…不思議としるし」を目撃した人々は、みな同じ恐れを抱きました。人々は「病人たちを道に運び出すほどになり、寝台や担架に乗せ、ペトロが通るとき、せめてその影に覆われようとした。」使徒教会の始まりとなったこれらの「不思議としるし」は、使徒たちの名によって行なわれたのではなく、イエズス・キリストの御名によって行なわれました。これはイエズスの神としての力のもう一つの証拠です。エルサレムの神殿の門で施しを乞う足なえの男にペトロが言った言葉は印象深いものです。「『私は金銀を持っていない。だが私の持っているものをあなたにあげよう。ナザレトのイエズスの御名によって、歩きなさい』』と言った。そして彼の右の手を取って起こすとすぐその足とくるぶしは強くなった。」また、エネアという名の中風の男にペトロが言ったことも思い出します。「『イエズス・キリストはあなたを治してくださる。起きて自分で床を整えなさい』』という、エネアはすぐ起きあがった。」（使徒行録 2・43 参照、5・15、3・6～7、9・34）

もう一人の使徒パウロは、ローマ人への手紙の中で「異教徒の中におけるキリストの使徒」として自らが行なったすべてのことを思い起こし、自分の唯一の真価はその役割において見出すことができると記しています。「キリストが異邦人を服従させるために私を用い、言葉と行動と、しるしと奇跡の力を持って、神の霊の力を持って行なわれたことのほか私はあえて言わない。」（ローマ 15・18～19）

初代教会、特に使徒たちによる世界の福音宣教時代には、イエズスが約束されたように「奇跡と不思議としるし」があふれていました。（使徒行録 2・22 参照） 救いの全歴史を通して、神の計画にかかわる決定的瞬間に「奇跡と不思議としるし」は繰り返されてきました。旧約時代におけるエジプトの圧政からのイスラエルの「脱出」、モーゼに率いられ、約束の地に向かう旅の途上でも同様でした。神の御子の託身において「時満ちたとき」（ガラツィア 4・4 参照）、神のみわざである「奇跡的しるし」は、キリストの神とし

での尊厳と御名への言及、従ってその真理と約束、命令、栄光への言及によって、新たな価値と新たな有効性をもつこととなります。イエズスの御名において、使徒たちや教会の中の多くの聖人は「奇跡と不思議としるし」を行なってきました。奇跡は今日も行なわれています。その一つに「人の子―神の子」の尊顔が描かれてあり、そこに私たちは恩寵と救いの賜を確認することができるのです。

《イエズスの使命 罪からの解放》

聖アウグスティヌスの著書を手掛りにすると、キリストがなされた奇跡を救いの力のしるしとして解釈することができます。「キリストが私たちのために人となられたことは、キリストが私たちの中で行なわれた奇跡よりも私たちの救いに役立ちます。そしてまた、靈魂を損なう悪の治癒は死すべき肉体の病の治癒より重要です。」（聖アウグスティヌス「ヨハネ福音書註解」17・1） 人々の救いと全世界の贖いのために、イエズスは肉体に関わる奇跡をも行なわれました。そこで「奇跡と不思議としるし」を通して、神との交わりへの招きを妨げる悪、不滅の靈魂を脅かす悪から人間を救う力を示されたことを考えましょう。

カファルナウムの中風者が癒される場面にこれがよく表れています。中風者を運んできた人々は、イエズスが教えを述べておられる家へ入れなかったため、屋根を壊して穴をあけ、病人を吊り降ろしました。病人は気がつくといエズスの足元にいたのです。「イエズスは彼らの信仰を見て、『子よ、あなたの罪は赦された』と中風の人に言われた。」その場にいた人々のうちの何人かはこの言葉を聞いて冒瀆の疑いを抱きました。「あれは神を汚す言葉だ。神以外に罪を赦せるものはない。」イエズスは人々の考えを見抜いて言われました。「中風の人に〈あなたの罪は赦された〉と言うのと〈起きて、床を取って行け〉と言うのとどちらが易しいと思うか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることをあなたたちに知らせよう。」そして中風の人に向かい「私は命じる。起きよ、床を取って家に帰れ」と言われると、「病人は起きてすぐ床を取り、人々の目の前を出ていき」「神を称えながら家へ帰って行った。」（マルコ2・1～12、マテオ9・1～8、ルカ5・18～26 参照）

罪を赦す権能

中風の人を癒された奇跡は罪を赦す救いの御力のしるしでしたが、それをイエズス御自ら説明されました。このようなしるしをなさったのは、世の救い主として来られたことを示すためでした。救い主の第一の仕事は、靈魂を損なう悪、人間を分裂させ神の救いを妨げる悪、つまり罪から人間を解き放つことであったのです。

聖アウグスティヌスの言葉を手掛りに、キリストがなされた奇跡の中でも極めて重要な「悪魔の追放」も説明できます。マルコの福音書に記されていますが、ゲラサ人の地で汚れた霊につかれた人をご覧になったイエズスは「汚れた霊よ、この人から出よ」と命じられました。（マルコ5・8）そこで特異な会話が始まります。「汚れた霊」はキリストの御言葉に恐れを感じ、キリストに向かって「いと高き神の子イエズス、あなたに何の関わ

りがありますか。神によってこい願います。私を苦しめないでください」と大声で叫びました。イエズスが「おまえの名は」と問われると「私の名は軍団です。大勢だからです」と答えました。（マルコ 5・7～9 参照） 病を引き起こす肉体的、精神的要因をもつ不明瞭な世界に私たちは住んでいます。そこに悪魔という現実も入っています。人間の言葉で様々に表され述べられているのですが、それは神、ひいては人間に対立するものであり、悪から人間を解き放つために来られたキリストに対立するものでした。しかし「汚れた霊」でさえ思わずイエズスの御前で、邪悪ながら理性的な知性をもって「いと高き神の子」と認めたのです。

マルコの福音書にてんかんの息子が癒された出来事があります。福音史家の記す症状「口から泡をふき、歯をくいしばり、体を硬直させる」はこの病気の特徴を示していますが、この息子の父親は、悪魔につかれていると言って息子をイエズスのもとに連れて行きます。悪魔によって息子はひきつけを起こし、地に倒れ、泡をふいて転び回っていると言います。このような症状に悪魔が入り込み働きかけることは可能です。確かにイエズスは息子のてんかんを癒されたのですが、「おしと耳しいの霊よ、私は命じる。この子から出て二度と入るな」という命令で癒されたのは意味深いことです。（マルコ 9・17～27 参照） ここでイエズスの御使命と、悪霊から人間を完全に解放する御力を再び確信します。

イエズスは、御自分の使命が人間を悪、そして何よりも霊的悪である罪から解放することを示されました。人間の歴史における悪の張本人・悪霊との戦いを示すことでした。福音書の中でイエズスが繰り返し述べておられるように、それがイエズスの御働き、使徒たちの働きの意味することでした。ルカの福音書に記されています「私は天にひらめく稲妻のようにサタンが落ちるのを見た。私は…敵のすべての力を踏みつける力を授けたのだから、もう何者もあなたたちを損なうことはないだろう。」（ルカ 10・18～19） またマルコの福音書でイエズスは、「宣教に送るために」十二人を決め、「悪魔を追い払う権威を与えられた。」（マルコ 3・14～15） さらにルカの福音書には最初の宣教から戻った七十二人の弟子がイエズスに「主よ、あなたの御名によれば悪魔さえも私たちに服従します」と報告したことが記されています。（ルカ 10・7）

罪と罪を生み出すものに勝る人の子の御力が、このようにはっきりと示されているのです。イエズスの御名は救い主を意味します。悪魔もその支配下にあります。しかし、イエズスの救い主としての御力が完全に実現したのは十字架上の犠牲においてでした。十字架はサタンと罪への完全な勝利でした。それが御父の御計画です。十字架上の辱めを通して復活と生命の栄光をお受けになることによって、神の御計画が実現したのです。このような逆説の中に、「十字架の力」と呼べる神の御力が光り輝いています。

罪の結果である死に対する勝利も救いの御力の一部であり、「奇跡と不思議としるし」によって明らかにされたこの世の救い主の使命に属することでした。罪と死への勝利は、ナザレトからカルワリオへと向かうイエズスの救い主としての使命の道を示していました。死に対する勝利への旅を示す「しるし」として、特に人々が死からよみがえった出来事をあげることができます。救い主なのかと尋ねた洗礼者ヨハネの使いに対してイエズスは、「死人はよみがえった」とお答えになりました。（マテオ 11・5） イエズスによって

様々な人々がよみがえりましたが、中でもベタニアのラザロの復活は注目に値します。ラザロの復活は、いわば罪と死に対する決定的な勝利となったキリストの十字架と復活の「前触れ」でした。

福音史家ヨハネがこの出来事を詳しく記しています。最後の場面を見れば十分でしょう。イエズスは墓を閉じていた石を取りのけるように言われました。「石を取りのけなさい。」死人の姉妹マルタは死んで四日も経っていて臭くなっていると言ったのですが、イエズスは声高く「ラザロ、外に出なさい」と呼ばれます。「すると死者は出てきた。」この出来事を見た多くの人がイエズスを信じましたが、ある人々は衆議所に行き、これを告げました。司祭長とファリサイ人は、ローマの軍隊がどう動くかを考え恐れしました。「ローマ人が来て、われわれの聖なる地と民を滅ぼすだろう。」そのときカヤファが沈黙を破りました。とてもよく知られている言葉です。「あなたたちは何一つわかっていない。一人の人が民のために死ぬことによって全国の民の滅びぬ方があなたたちにとってためになることだとは考えないのか」と。「彼は自分からこう言ったのではない。この年の大司祭だったので、預言したのである」と福音史家は記していますが、どのような預言だったのでしょうか。ヨハネがキリスト教的な意味を説明しています。「イエズスがこの民のために、また、ただこの民のためだけではなく、散っている神の子らを一つに集めるために死ぬはずだった」と。(ヨハネ 11・38～43、45～48、49～52 参照)

ヨハネによるラザロの復活の記述には、この奇跡のもつ救いの意義が明らかにされています。決定的な表示です。衆議所がイエズスを殺そうと決めたのは、その時からだったのです。「この民のため」「散っている神の子らを一つに集めるため」、この世の救いのために、贖いの死となるものでした。その死が、死に対する勝利となるものであることをイエズスはすでに述べておられました。ラザロの復活の時、マルタにはっきりと仰せになったのです。「私は復活であり命である。私を信じるものは死んでも生きる。生きて私を信じる者は永久に死なぬ。」(ヨハネ 11・53 参照、11・25～26)

最後に再び聖アウグスティヌスの言葉に戻しましょう。「われらの主、救い主イエズス・キリストが行なわれたことをよく考えてみれば、奇跡的に見えるようになった盲人の目は死によって閉じ、奇跡的に治った足なえの足は死によって動かなくなることがわかります。死すべき肉体において一時的に癒された全てのことは、最後にはもとに戻ります。しかし信じた霊魂は永遠の生命に入ります。弱い人間において、主は信じた人に偉大なしるしを与えてくださいました。主は罪の赦しのためにこの世に来られ、十字架の辱めによって人間の弱さを癒してくださいました。」(聖アウグスティヌス「ヨハネ福音書註解」17・1)

そうです、「奇跡と不思議としるし」を行なわれたのは、御自分が救い主、神の子であることを示すためであり、人間を罪と死から解放する御力を有する唯一の御方、真のこの世の救い主であることを明らかにするためであったのです。

《キリストの奇跡は救いのしるし》

福音書では、キリストによる奇跡は人類とこの世の歴史に入った神の国のしるしとして

はっきりと示されています。「私が神の霊によって悪魔を追い出すなら、神の国は到来しているのである」と、イエズスは仰せになりました。(マテオ 12・28) 奇跡についてどのようなことが言われてきたとしても(しかもそれらに対する答えは護教論によって与えられています)、イエズスが行なわれ、イエズスの御名において使徒たちや弟子たちが行なった「奇跡と不思議としるし」を、正真正銘の福音書の文脈から切り離すことはできません。初代のキリスト信者は、福音書の主な土台となっている使徒たちの説教を通して、最近起こった驚くべき出来事を目撃者の証言を聞きました。従って、歴史批評の観点からその出来事を調べることができたのです。ですから奇跡が福音書に記されていても驚きませんでした。後世の反論がどのようなものであっても、キリストの御生涯と御教えの本当の源泉(情報源)から、確かに一つのことが浮かび上がってきます。すなわち、使徒たちと福音史家、初代教会は、奇跡の一つひとつに自然とその法則を越えたキリストの崇高な力を見ていたということです。神を、父なる創造主、世界の主として示された御方は、自らの力で奇跡を行なう時、御自分が御父と一体であり、天地万物の主宰者に等しい者、つまり神の御子であることを示されたのでした。

ところで幾つかの奇跡は、救いの摂理(経倫)における人の子の神としての御力を証するという根本的な意味を補う面を持っています。

ガリラヤのカナで最初に行なわれた「しるし」について考えてみれば、福音史家ヨハネが記していますが、この「しるし」によってイエズスは「(御自分の)栄光を示されたので、弟子たちはイエズスを信じた」のでした。(ヨハネ 2・11) 奇跡は信仰を引き起こすためでしたが、婚宴の席で行なわれました。従って、少なくとも福音史家の意向によると、その「しるし」は、新旧両約聖書の中でしばしば結婚というイメージで表されている〈契約と恩寵の計画〉を強調しています。そこでガリラヤのカナの奇跡を、王がその息子のために用意した婚宴のたとえ話と関係づけ、その婚宴に「似ている」世の終りの「天の国」と結びつけることができます。(マテオ 22・2 参照) すなわち、イエズスの初めての奇跡をこの王国の「しるし」として理解することができるのです。特に「イエズスの時」つまり受難と栄光の時はまだ来ていなかったからです。(ヨハネ 2・4、7・30、8・20、12・23~27、13・1、17・1 参照) その「時」は「天の国の福音」を述べることによって準備されるはずでした。(マテオ 4・23、9・35 参照) マリアのとりなしによってなされたこの奇跡はまさに起ころうとしていることの「しるし」、象徴的告知とみなすことができます。

カファルナウムの近くでパンを増やされた奇跡は救いの摂理(経倫)の「しるし」であると考えれば、より一層はっきりと理解することができます。ヨハネがこのしるしを翌日のイエズスの教えと結びつけています。その教えの中でイエズスは、「神から遣わされた者を信じ」消えることのない食物を求めよと教えられました。そして御自身が「世に命を与える」真のパンであること、「世の命のために」肉をわたされた御方であることをお示しになりました。救いをもたらす受難と死の前触れであることは明白でした。受難の前夜に永遠の生命のパンの秘跡として制定されたユーカリスチア(御聖体)の準備だったので。(ヨハネ 6・29、27、33、51~58 参照)

保護し活動する現存

ゲネサレト湖で嵐を静められる。これは歴史を歩むうちには嵐にさらされる時があっても、教会という〈船〉にはいつもキリストが現存しておられることの「しるし」として理解することができます。弟子によって目を覚まされたイエズスは嵐と海を戒められました。すると大嵐になりました。その時イエズスは、「なぜ恐れるのか。まだ信仰がないのか」と言われました。(マルコ 4・40) 他の出来事と同様ここにおいても、イエズスの神としての助けに疑いを持つよう誘惑されそうな歴史の中の嵐の時、弟子たちや使徒たちに対し、働きと保護を伴う御自身の現存を信じさせるというイエズスの意向が見られます。事実、奇跡はイエズスの現存の「しるし」であり、信者と教会にとってイエズスを信じる保証である、とキリスト教の教えと霊性は解釈しています。

海を歩いて弟子たちの方へ来られましたが、これもイエズスの現存の「しるし」であり、弟子と〈教会をいつも見つめていてくださること〉の証です。イエズスを見て幽霊だと思った弟子たちに「安心せよ、私だ、恐れるな」と言われました。(マルコ 6・49～50、マテオ 14・26～27、ヨハネ 6・16～21 参照) マルコが弟子の驚きの理由を次のように記しています。「彼らはまだパンのことを悟らず、その心は閉ざされていたからである。」(マルコ 6・52) 次にマテオが詳しく記しています。ペトロは舟をおりて水の上を渡ってイエズスの方に行きたかったが、沈みかけたので恐くなり、助けを求めて叫んだのです。するとイエズスはすぐに彼を助け、やさしく戒められました。「信仰のうすい者よ、なぜ疑ったのか。」「舟にいた人々は『本当にあなたは神の子です』と言った。」(マテオ 14・31、33)

奇跡の大漁は、使徒たちと教会がキリストの救いの力に深く結ばれていれば得られる、宣教の豊かな実りの「しるし」として考えることができます。ルカは、ペトロがイエズスの足元にひれ伏し叫んだことを記しています。「主よ、私から離れてください。私は罪人です。」イエズスは答えられました。「恐れることはない。あなたはこれからのち、人を漁るだろう。」ヨハネは、御復活ののちの大漁と、キリストがペトロに「私の小羊を牧せよ、私の羊を牧せよ」と言われた場面が続けていますが、この結びつきは大変意味深いものです。(ルカ 5・4～10、ヨハネ 21・3～6 参照、15～17 参照)

キリストの奇跡は創造における神の全能の現れで、それは人間と被造物を司る救い主の御力のうちに明らかにされますが、同時に奇跡とは、救いのみわざを示す「しるし」でもあるのです。これがキリストの託身(受肉)とともに明らかにされた救いの摂理であり、人類の歴史の中で決定的に実現され、神のみわざでもある目に見える世界に刻まれた救いの摂理です。湖上の弟子のように、人々はキリストの奇跡を目のあたりにして「これは誰だろう。嵐も海もこの人に従うとは」と互いに尋ね合います。(マテオ 4・41) 人々はこれらのしるしを目撃して、御子を通して神が人類にお与えになった救いの恵みを受け入れる準備をするのです。

これが、キリスト時代の人々の目前でイエズスが行なわれ、またその後「ナザレトのイエズス・キリストの御名によって歩きなさい」のように、キリストの御名の救いの力を通して、弟子たちや使徒たちが行なった奇跡としるしが意図することなのです。(使徒行録

《真の人 イエズス・キリスト》

真の神・真の人であるイエズス・キリストの秘義は、私たちの信仰の中心であり、キリスト論の重要な真理です。今回は、聖書、特に福音書とキリスト教承伝（聖伝）の中にこの真理の根拠を探してみましょう。

すでに述べたように、キリストは御自分を神の御子として示しておられます。「私と父とは一つである」と仰せられ、「私は存在する」という表現で神の御名を御自分に帰せられました。（ヨハネ 10・30、8・58 参照） また「私には天と地の一切の権能が与えられている」とも言われました。（マテオ 28・18） この権能は、全ての人に最後の審判を宣告する権能、神が与え、また拘束力を付与された律法にまさる権能、罪を赦す権能を含んでいます。（マテオ 5・22、28、32、34、39、44、ヨハネ 20・22～23 参照） イエズスは御父から、この世に最後の審判を宣告する権能をお受けになりましたから、「見失ったものを尋ねて救うために」この世に来られたのです。（ヨハネ 5・22 参照、ルカ 19・10）

全被造物に及ぶ神としての権能を確認するため、イエズスは奇跡を行なわれました。それは、神の国が彼とともにこの世に入ったことの「しるし」でした。

「みわざと御教え」によって神の子であることを証明されたイエズスは、同時に、真の人間であることもお示しになりました。イエズスが何よりも明白に意識しておられたこの真理を新約聖書全編、特に福音書が証明しています。使徒や福音史家たちは、少しの疑いもなく、これを認め、そして伝えました。今回は簡単に、この真理に関する聖書のデータを集め、真の神としてのキリストの考察と関連させながら、真の人間としてのキリストについて考えてみましょう。

イエズスを特異で驚くべき人間だとは認めるが、とにかく単なる人間に過ぎぬ、と考える傾向が広まっています。したがって先に述べた方法に従い、神の御子の真の人性を明らかにするのが今日非常に大切だと思われまます。現代の特徴とも言えるこの傾向は、ある意味ではキリスト教初期のドケティズム（キリスト仮現論）の正反対です。この異端によると、イエズス・キリストは人間の姿をし人間のように見えるだけで、あくまでも神であるというのでした。

このような相反する傾向に直面する教会は、カトリック要理の教えにあるように、キリストは神であると同時に人間である、すなわち、キリストは真の神であり真の人間であって、神性と人性との二つの本性を備えたみことばの唯一のペルソナであると宣言します。これこそ多くの光を投げる深遠な信仰の秘義なのです。

聖霊によるキリストの人性

キリストの真の人性に関する聖書のテキストは数多く、どれも明白なものです。続く考察のために、いくつかを列記しましょう。

まず最初は託身（受肉）です。使徒信経に、「みことばは肉体となられた」と宣言されています。この真理は、ヨハネ福音書のプロローグに見事に表現されています。「みこ

とばは肉体となって私たちのうちに住まわれた。」（ヨハネ 1・14）ギリシャ語で肉体を表す語は「サルクス」ですが、これは実際にそうであるように人間が肉体を有するゆえに不安定で弱く、束の間の存在であることを示しています。（肉は草のようなもの イザヤ 40・6）

この意味でイエズス・キリストは真の人間でありました。イエズスは、ナザレトの処女マリアから肉体と人性をおとりになりました。アンティオキアの聖イグナチオがイエズスを「サルコフォロス（肉体を持つ方）」と呼んでいます。それは一人の婦人から人間が誕生したという事実を鋭く示唆しています。この婦人がイエズスに「人間のからだ」を与えたのです。聖パウロはこう言っています。「女から生まれさせ、生まれさせた御子を神は遣わされた。」（ガラツィア 4・4）

福音史家ルカはベトレヘムの夜の出来事を記し、一婦人からのこの誕生を伝えています。「そこに居る間にマリアは月満ちて初子を生んだので、布に包んでまぐさ桶に子を横たえた。」誕生の八日目に御子は割礼を受け、「イエズスと名づけ」られた。四十日目にモーゼの律法に従い、神殿に「初めての男の子」として捧げられた。イエズスは、他の子らと同じく「次第にすこやかに成長し、知恵に満たされた。」「イエズスは神と人の前に、その知恵も背丈も寵愛もますます増していられるのだった。」（ルカ 2・6～7、21、22～24 参照、40、52）

福音書にたびたび記されている表現を読めば、一人の成人としてのイエズスが目に映ります。真の人間、肉体を持った人間として、イエズスは疲れ、飢え、渴きを覚えられました。「四十日四十夜断食してのち、飢えを感じられた。」（マテオ 4・2）「旅に疲れたイエズスは泉のかたわらに座られた。サマリアのある女が水を汲みに来たので、『水を飲ませてください』と言われた。」（ヨハネ 4・6～7）

というわけでイエズスは疲れと苦しみを伴う肉体、死すべき肉体をもっておられることがわかります。その肉体で、ついには笞打たれ、茨の冠を被せられ、十字架につけられるという殉教の苦難を受けられたのです。死を目前にした十字架上での臨終の苦しみの時、「私は渴く」と仰せになりました。（ヨハネ 19・28）この言葉には真の人性を示す最後の時を迎え、悲しみに満ちた人間の心が如実に現れています。

イエズスがゴルゴタの苦しみを経験できたのは、真の人間であったからです。イエズスが経験されたような死に方のできるのは人間だけです。キリストの死については多くの目撃者がいました。友人や弟子だけでなく、ヨハネが語るように、兵士たちも確認したのです。「イエズスの所にくると、もう死んでおられたので、そのすねを折らなかった。そのとき二人の兵士が槍で脇を突いたので、すぐ血と水が流れ出た。」（ヨハネ 19・33～34）使徒信経の中で教会は、イエズスの誕生と死の真理を宣言し、次に復活の真理に移ります。「三日目に死者のうちよりよみがえった。」

復活によってイエズスが真の人間であることを再び確認できます。真の人間だけが十字架上で苦しみ死ぬことができたのです。真の人間だけが死者のうちよりよみがえることが可能であったのです。よみがえるとは肉体のうちに生き返ることを意味します。変容し新たな質と力を受け、（昇天と復活において）栄光をお受けになったのですが、それは真の

人間の体においてでした。実際に復活されたキリストは使徒たちと接触されました。使徒たちはキリストを眺め、見つめ、その御傷に触れることができたのです。主は彼らに話しかけ、共に過ごし、食物もおとりになりました。「彼らが焼いた魚一片を差し出すと、それを取り、彼らの前で食べられた。」（ルカ 24・42～43）最後に天に昇り、「御父の右」に座したのは、復活し、栄光を受けてはいるものの、真の人間の体においてであったのです。

キリストは真の神・真の人です。外観だけでなく、幻や幽霊でもない、真の人間です。だから使徒や初代の信者がキリストを知ることができたのです。これこそ彼らが伝える証言です。

というわけで、キリストにおいて神であることと、人であることとは、相対立するものでないことがわかります。人間は最初から神の似姿として創られているので、人間であることは、神であることを表し得るのです。キリストにおいて実にはっきりとこの点が証明されています。人性を通して、真の人間の生活を通して、キリストは御自分の神性を啓示なさいました。キリストの人性は主の神性、すなわち御子のみことばのペルソナを表しているのです。

しかし、そのために神の御子が「より少なく」人間であるというのではありません。御自分が神であることを示すために「より少なく人間」である必要はなかったのです。キリストは完全に人間でした。神のみことばとしての唯一のペルソナにおいて人性を取ったという事実こそ、キリストが完全な人間性を百パーセント実現しておられたことを示しています。これはキリスト論の人間学的な問題になりますが、のちに述べることにしましょう。

《福音書に見るイエズスの人性》

イエズス・キリストは真の人です。このテーマについて前回の考察を続けたいと思います。これは私たちの信仰の土台をなす真理です。使徒や弟子たちの証言によって確証されたキリスト御自身の御言葉に基づく信仰です。教会の教えの中で世代から世代へと伝えられてきました。「私は信じます…真の神、真の人を…幻ではなく、唯一の神の御独り子を。」（第二リヨン公会議『カトリック教会文書資料集』DS 852）

最近この教えが第二バチカン公会議で想起され、肉体を取り、私たちと同じ人間となり、人としての生活を始められたというみことばの新たな関係が強調されました。「御託身（受肉）によって、神の御子はある意味で人間一人ひとりと結ばれた。御子は人間の手で働き、人間の知力で考え、人間の意志で行動し、人間の心で愛された。処女マリアより生まれた御子は、罪を除いてすべてにおいて私たちと同じになった。」（『現代世界憲章』22）

キリストが私たちに「似た」御方であることを述べましたが、それはキリストが真の人間であったことからわかることでした。「みことばは肉体となられた。」この〈サルクス sarx〉肉体という語は〈サルキコス sarkikos〉肉体をもったものとして人間を表しています。みことばは女から生まれて存在を始めました。（ガラツィア 4・4 参照）肉体を持つナザレトのイエズスは、他の人間と同様に苦しみ、飢え、渇きを覚えられました。その

御体は傷つくこともあり、苦しみを伴い、肉体的痛みを感じられるものでした。「十字架につけられ、死して葬られ給えり。」苦難をお受けになったのも、十字架上にて死去されたのもこの肉体においてでした。

先に引用した公会議のテキストはイエズスについて次のように結んでいます。「御子は人間の手で働き、人間の知力で考え、人間の意志で行動し、人間の心で愛された。」

イエズスの心理

今日は、イエズスの心理の核心に迫る今述べた点に注目してみましょう。イエズスは、人間のもつ喜び、悲しみ、怒り、驚き、愛といった感情を覚えられました。たとえば次のように記されています。「イエズスは聖霊によって喜びに身をふるわせられた。」エルサレムを眺めて泣かれたことも記されています。「町に近づくと、それを眺めて泣かれたイエズスは『ああ、エルサレム、もしこの日に平和をもたらさずの者をおまえが知っていたら…』と言われた。」（ルカ 10・21、19・41～42）そしてまた、友ラザロの死にも泣かれました。「イエズスは、彼女（マリア）がすすり泣き、ともに来たユダヤ人たちも泣いているのを見て感動し、心を騒がせられ『彼をどこに納めたのか』と言われた。マリアは『主よ、来てごらんください』と答えた。イエズスは涙を流された。」（ヨハネ 11・33～35）

ゲッセマニの園でのイエズスの悲しみは特に激しい感情でした。「ペトロ、ヤコボ、ヨハネを連れて行かれた。イエズスは激しい恐れと悩みに打ち沈み、『私の魂は死ななばかりに悲しむ』と言われた。」（マルコ 14・33～34、マテオ 26・27 参照）ルカの福音書には「イエズスはもだえていよいよ切に祈られたので、御汗は地のしずくのように地に落ちた」とあります。ここでもイエズスの真の人性を証明する精神的、肉体的状態が表れています。（ルカ 22・44）

イエズスの怒りについても記されています。安息日に片手の動かぬ人を癒された時、まずイエズスは人々に尋ねられました。「『安息日に善を行なうのと悪を行なうのと…ゆるされているのはどちらか』と言われた。彼らは黙っていた。イエズスは一同を怒りの眼差しで見回し、その心のかたくなさを悲しみつつ、手なえの人に『手を伸ばせ』と言われた。その人が手を伸ばすと、手は治った。」（マルコ 3・5）

神殿から売る人、買う人を追い出された場面においても同様でした。「イエズスは、神殿内から売る人、買う人をすべて追い出し、両替屋の机やほと売りの腰掛けを倒し、『〈私の家は祈りの家といわれる〉と書かれているのに、それを盗人の巣にするのか』と言われた。」（マテオ 21・12～13、マルコ 11・15）

イエズスが「驚かれた」ことも記されています。「イエズスは彼らの不信仰に驚かれた。」（マルコ 6・6）感嘆の念に心動かされることもありました。「ゆりの花を見よ。…ソロモンさえその栄華のきわみにも、ゆりの一つほどにも装わなかった。」（ルカ 12・27）カナンの女の信仰に感心されて、「ああ女よ、あなたの信仰は深い」と言われました。（マテオ 15・28）

中でもとりわけ、イエズスが愛を実行された御方であることを福音書は記しています。

天の国に入るためには何をすべきかを尋ねてきた若者への話の場面で「イエズスは彼をじっと見つめ慈しまれた」とあります。(マルコ 10・21) 福音史家ヨハネは「イエズスはマルタとその姉妹ラザロを愛しておられた」と記し、自分を「イエズスの愛しておられた弟子の一人」と呼んでいます。(ヨハネ 11・5、13・23)

イエズスは子供を愛されました。「イエズスに触れてもらおうとして人々は幼い子を連れて来た…イエズスは彼らを招き、手を置いて祝福された。」(マルコ 10・13～16) 愛の掟を宣言なさる時、イエズスは御自ら実行された愛に言及して「私が愛したようにあなたたちが互いに愛し合うこと、これが私のおきてである」と仰せられました。(ヨハネ 15・12)

キリストの受難、特に十字架上の苦悩は愛の絶頂とも言えるでしょう。その愛をもってイエズスは、「この世にいるご自分の人々を愛し、彼らに限りなく愛を示された」のです。(ヨハネ 13・1) 「友人のために命を与える以上の大きな愛はない。」(ヨハネ 15・13) しかしそれは、この世の生活で味わわれた放棄と悲しみのどん底でもあったのです。「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ…私の神よ、私の神よ、なぜ私を見捨てられたのか。」(マルコ 15・34) これは、放棄された者の状態を鋭く描く表現として永遠に残るでしょう。それはイエズスが詩篇 22 の第 2 節から取った言葉で、神による一瞬の放棄に対する神秘的感情を伴った、魂と肉体の極度の苦しみを表しています。御受難全体を通して最も激しい苦しみの時でした。

フィリッピン人への手紙に記されているように(2・7 参照)、イエズスは奴隷の姿をとり、人間に似たものとなりました。ヘブライ人への手紙の中で、「将来の恵みの大司祭」として記され、「私たちの大司祭は弱さに同情されぬ御方ではなく罪を除いてすべてを私たちと同様に味わわれた御方」であることが確認されています。(ヘブライ 9・11、4・15 参照)パウロが「神は罪を知らなかった御方を私たちのために罪となされた。それは私たちをその方において神の正義とするためである」と記していますが、真に、イエズスは〈罪を御存じなかった〉のでした。(コリント②5・21)

イエズスは「私に罪があると確認できる人がいるか」と仰せになりました。(ヨハネ 8・46) 教会の信仰は次のように表されています。「イエズスは罪のない状態で宿り、生まれ、死去された」と。フィレンツェ公会議では全聖伝との一致のうちにこれが宣言されました。(『カトリック教会文書資料集』DS 1347) 「罪のない状態で宿り、生まれ、死去された。」まさに正義の人、聖なる人でした。

新約聖書、信仰宣言、第二バチカン公会議は共に繰り返します。「イエズス・キリストは真に私たちの一人となられ 罪を除いてすべて私たちと同じになられた。」(ヘブライ 4・15 参照) 「第二のアダムであるキリストが、…人間を人間自身に完全に示し、人間の高貴な召命を明らかにする」のは、キリストが人間に似たものであらせられたからでした。(『現代世界憲章』22)

このように考えると、第二バチカン公会議が聖アンセルモの有名な論文「なぜ神が人間に？」の質問に答えを与えているように思われます。これはニケア・コンスタンチノーブル信経で宣言するように、「私たち人間のために、私たちの救いのために」真の人間とな

られた神の御子の秘義を探る英知の質問です。

キリストは「罪を全くご存じではなかった」ゆえに、人間を「完全に」示すことができました。罪は決して人間を豊かにしません。それどころか人間を低め、小さくします。当然もつべき完全性を奪ってしまうのです。（『現代世界憲章』13 参照） 墮落した人間の救助、人間の救いこそ、託身（受肉）の理由なのです。

《全人類と連帯するキリスト》

真の人イエズス・キリストは「罪を除いてすべて私たちと同様に味わわれた。」これが前回のテーマでした。

キリストがまったく罪を犯さない御方であったことは、地上における御生活と使命の全容が証明しています。キリストは「私に罪があると確認できる人がいるか」とお尋ねになりました。（ヨハネ 8・46） 「罪のない」人、イエズス・キリストは、生涯にわたり、罪と罪に陥れる全てのものに対して戦われました。人類の歴史の「始めから」「うその父」であったサタンとの戦いでした。（同 8・44 参照） この戦いは救い主としての使命の出発点で悪魔の試みに始まり、十字架と復活において最高潮に達します。（マルコ 1・13 他参照） それは勝利に終る戦いでした。

罪とその根源との戦いによって、イエズスは人間から離れることなく、反対に人間一人ひとりに近づかれました。地上での御生活中、イエズスは皆から罪人と思われていた人々の近くにいることを何度も示されました。福音書にはこれが多く記されています。

この点からみれば、イエズスが示された御自身とヨハネとの比較はとても意義深いものです。「ヨハネが来て飲み食いしないと〈あの男は悪魔につかわれている〉と言ひ、人の子が来て飲み食いすれば〈大食漢、酒飲み、税吏と罪人の仲間だ〉と言ひ。」（マテオ 11・18～19） イエズスはこう言われました。この言葉の論争的性格は、人々の態度に明らかに表れています。人々はヨルダン川で洗礼を受けていた預言者、厳しい修行者、洗礼者ヨハネを非難し、次いで人々の間で活動し、働かれたイエズスを非難しました。しかしこれらの言葉には、罪人に対するイエズスの態度と気持ち、振る舞いがよく表れています。

イエズスは、罪人や税吏の仲間だと非難されました。（税吏は搾取を働き、法を守らない者とみなされていた。マテオ 5・46、9・11、18・17 参照） しかし、その非難を否定されませんでした。それが事実であることは、福音書の多くのエピソードが確証しています。ただし、イエズスは知らぬ顔をし、沈黙されたという様子はまったくみられません。ザケオの場合、イエズス御自身が彼の家に泊まることを望まれました。「ザケオ、早く下りよ。」（ザケオは背が低いため、イエズスを見ようと木に登っていた。） 「私は今日あなたの家に泊まる」と。そして喜んで飛び下りイエズスを迎えたザケオに「今日この家に救いが来た。この人もアブラハムの子である。人の子は見失ったものを尋ねて救うために来た」と言われました。（ルカ 19・1～10 参照） この出来事を見ると、イエズスが、税吏や罪人と親しく接すると同時に、彼らの救いを望まれたことがわかります。

アルフェオの子レビにも同じような出来事がありました。この人の場合は特に深い意味があります。イエズスは、レビが収税所に座っているのをご覧になり、弟子にするため

「私について来なさい」と呼びかけました。すると彼は立ち上がってついて行きました。この人は十二人の弟子の一人マテオのことで、福音書の著者であることはよく知られています。マルコの福音には、イエズスが「彼の家で食卓につかれた」こと、そして「多くの税吏や罪人もイエズスや弟子たちと同じ席についていた」ことを記していますが、この時にも「ファリサイ派の律法学士たち」は弟子たちに抗議します。するとイエズスは「医者が要るのは健康な人ではなく病人である。義人ではなく罪人を招くために私は来た」と言われたのです。（マルコ 2・13～15 参照、17）

「税吏や罪人」を含む人々と共に食卓につくことは、救い主としてのお働きの始めからイエズスのうちに見られた人情味あふれる振る舞いでした。救い主としての御力を示された最初の出来事は、ガリラヤのカナでの婚宴の席においてでした。そのときイエズスは、御母と弟子たちと共に宴席におられたのです。（ヨハネ 2・1～12 参照） それから後も、たびたび会食の招きを受けられました。税吏ばかりでなく、最も激しい反対者であったファリサイ人からもです。「あるファリサイ人がともに食事してくれるようにイエズスを招いたので、イエズスはその家に行き、食卓につかれた」とルカは記しています。（ルカ 7・36）

「義人」とみなされていた人々によって、軽蔑され責められていた多くの「罪人」を含むあわれむべき人々に対してイエズスがとられた態度に新たな光明を投じることが、食事の席上で起こりました。町で罪女と噂のある女が人々の中にいたのです。女は泣きながらイエズスの御足に口づけし、香油を塗りました。イエズスと主人の間で論議が交わされ、イエズスは、罪の赦しと信仰による愛の深いつながりを示されます。「その多くの罪はゆるされた。多く愛したのだから。…それから女に向かい『あなたの罪はゆるされた…あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい』と言われた。」（ルカ 7・36～50 参照）

他にもあります。その一つはある意味で一層劇的な事件でした。「姦通で捕らえられた女」のことで、（ヨハネ 8・1～11 参照） 前の出来事同様、ここにおいてもイエズスがどういう意味で「税吏と罪人の仲間」であるかが示されています。イエズスは女に言われました。「行け。これからはもう罪を犯さぬように」と。（同 8・11） 「罪を除いてすべて私たちと同じであった」イエズスが、罪人を罪から解放するために、彼らの近くにおられたことが示されています。旧約の律法のもとで罪人と判断されていた人々に対してとられていた厳しさと異なり、全く「新しい」方法で、救い主としての目的を達しておられたのです。すべての人に向けられた偉大な愛の心でイエズスは働かれました。それは、神に似せて創られた人間との深い一致（連帯）に基づくものでした。（創世 1・27、5・1）

この一致（連帯）は何によるのでしょうか。それは、神の内にある愛の現れです。神の御子はこの愛を示すためにこの世に来られました。御子が人、私たちの一人になられたことによってすでにそれは明らかです。真の人イエズス・キリストが、人性において私たちと結びつかれたことは、御子と全人類との一致（連帯）の現れです。それは、一人ひとりを愛してくださる神の愛を雄弁に語っているからです。ここで全く特別の方法で愛が確認されています。愛する人は愛する者と全てをわかち合うことを望むものです。神の御子が人間となられたのはこのためでした。「実に彼は私たちの労苦を背負い、私たちの苦しみを

担った」とイザヤは御子について預言しました。(マルコ 8・17 参照、イザヤ 53・4) イエズスは全ての息子、娘と共に同じ条件を味わわれました。ここでもイエズスは、一人ひとり全ての人間の尊厳を示されました。託身(受肉)は人間と人類のすばらしい「再評価」と言えるでしょう。

肉体的、精神的な重荷のもとで苦しむ人々に対するこの「愛と連帯」は、人の子の地上での全生活と使命の中で特に際立つ特徴です。生涯の終りに御子は、多くの人のあがないとして御自分の命をお与えになりました。十字架における贖いの犠牲です。至高なる犠牲に至るまでのイエズスの地上の生活は、人類との一致(連帯)の多様な現れでした。次のイエズスの言葉がそれを要約しています。「人の子が来たのは仕えられるためではなく仕えるためであり、多くの人のあがないとして自分の命を与えるためである。」(マルコ 10・45) イエズスは全ての子供と同様に子供でした。ナザレトのヨゼフの側で、誰もがするように働かれました。(『働くことについて』26 参照) イエズスはイスラエルの子でした。その民の文化、伝統、希望、苦しみを共に味わわれました。使命に召された人の生活によく起こることも経験されました。使命遂行のために自ら選んだ使徒の一人に裏切られたのです。これによって、深い悲しみを味わわれました。(ヨハネ 13・21 参照)

「多くの人のあがないとして自分の命を与える」時が近づくと、自ら進んでそうなさいました。こうして、犠牲というかたちで一致(連帯)の秘義を完了されました。ローマ総督は集まった告訴人の前で「見よこの人を！」という以外の言葉を見出せませんでした。(ヨハネ 10・18 参照、19・5)

秘義に気づかなくても、その瞬間に感じられたイエズスの引きつける力に無感覚ではいられなかった異教徒のこの言葉は、キリストの人間としての現実についての全てを語っています。イエズスは人間、真の人間でした。罪を除いてすべて私たちと同じであったイエズスは、罪のいけにえとなられ、十字架の死に至るまで、全てと一致してくださったのです。

《キリストは自らを無とされた》

「見よ。この人を。」(ヨハネ 19・5) 前回は、死刑の宣告の前に、イエズスを笞打たせ、司祭長と長老の前に連れ出したときのピラトのこの言葉について考えました。傷を負い、茨の冠を被せられ、緋色の衣を着せられ、兵卒たちに嘲られ、死なんばかりになられたイエズスは苦しむ人間の象徴です。

「見よ、この人を！」この言葉には、ある意味で真の人キリストの真理が全て含まれているといえます。「罪を除いてすべて私たちを同じであった」キリスト、「ある意味で全ての人と一致している」キリストの真理が含まれているのです。(『現代世界憲章』22 参照) 人々はキリストを「税吏と罪人の仲間」と呼びました。まさに罪の犠牲として、キリストは「罪人」をも含む全人類と一致していただきました。十字架上の死に至るまで一致してくださったのです。イエズスはいけにえという状態にまで降りていただきました。ここにイエズスの人性についての最後の一面が浮かび上がってきます。そしてこの一面は「自分自身を無とすること」(ギリシャ語で〈ケノーシス〉)の秘義の光のもとに受け入

れ、また深く黙想しなければなりません。キリストは「本性として神であったが、神と等しいことを固持しようとはせず、かえって奴隷の姿をとり、人間に似たものとなって、自分自身を無とされた。その外貌は人間のように見え、死ぬまで、十字架上に死ぬまで、自分を卑しくして従われた」のです。（フィリッピ 2・6～8）

書簡のこの節は、キリストの〈ケノーシス〉（自らを無とすること）の秘義に向かわせます。パウロはこの秘義を表すのに「自分自身を無とされた」という言葉を用いて託身（受肉）の事実を示しています。「みことばは肉体となった。」（ヨハネ 1・14）神である御子は神でありながら人性をとり、真の人となりました。人としてのキリストの真理は常に神である御子との関係において考えなければなりません。パウロの書簡にこの不変の関係が示されています。「自分自身を無とされた」ことは、決して神でなくなったことを意味するものではありません。そのようなことは論外です。パウロがはっきりと示しているように「本性として神であったが」「神と等しいことを固持しようとはされなかった」のです。栄光を奪われ苦しみと死に従属する人性を、真の神の子としてお取りになりました。最後の犠牲に至るまで御父に従われたのです。

「人間に似たものとなること」は、「自発的な放棄」を意味します。それも人間として享受できる「特権」をも含んだ放棄であったのです。事実御子は「奴隷の姿」を取りました。権力者の仲間ではなく、仕える者の一人となることを望んだのです。「人の子が来たのは仕えられるためではなく仕えるためである。」（マルコ 10・45）

キリストのこの世での生活は始めから貧しさという特徴をもっていました。御誕生の記述がはっきりと示しています。ルカが伝えています、「宿屋に部屋がなく」お生まれになったイエズスは、布に包まれまぐさおけに横たえられました。（ルカ 2・7 参照）マテオによれば、イエズスは生まれて間もなく避難民の体験をされました。（マテオ 2・13～15 参照）ナザレトの隠れた生活も大層慎ましいものでした。一家の主人は大工、そしてイエズスも養父と共に働かれました。（マテオ 13・55 参照、マルコ 6・3）教えをのべ始められた時もひどく貧しかったのです。宣教の使命に伴う不安定な生活状況に触れて言われました。「きつねには穴があり、空の鳥にはねぐらがあるが、人の子には枕するところもない。」（ルカ 9・58）

「しるし」を示されたにも拘わらず、キリストの救い主としての使命は始めから反対と誤解に遭いました。キリストは監視下にありました。権力と影響力をもつ人々によって苦しめられ、ついには訴えられ、有罪の判決を受け、十字架に付けられました。刑の中でも最も恥ずべき刑、重罪人にのみ科せられる刑、奴隷に対する刑でした。パウロが記すように、キリストは文字通り「奴隷の姿」を取られたのです。（フィリッピ 2・7）

「自分自身を無とされた」ということは、キリストが真の人間であることを際立たせる真理ですが、それによって人間というものの真理が再び確認されたといってもいいでしょう。人間の再確認、人間の回復と言えるでしょう。御子が「神と等しいことを固持しようとはされなかった」ことを考えると、「はじめに」アダムとエバが屈した「善と悪を知る神のようになる」という誘惑を思い出します。（創世 3・5）アダムとエバは被造物にすぎなかったにも拘わらず、「神のようになる」という誘惑に屈したのです。神である御子は

「神と等しいことを固持しようとはされなかった。」人となることによって「自分自身を無とされ」、全人類を困窮した状態から本来の尊厳にまで回復させてくださいました。

キリストの〈ケノーシス〉（自分自身を無とすること）の秘義を表すためにパウロは「自分を卑しくして」と表現しています。贖いの真理を伝えるためにこの表現を用いているのです。イエズス・キリストは「死ぬまで、十字架の上に死ぬまで、自分を卑しくして従われた。」（フィリッピ 2・8）ここでキリストの〈ケノーシス〉の決定的な面が記されています。人としての観点から受難と恥すべき死によって自分自身を無とされたという面であり、神としての観点から御子を通して御父の慈しみあふれる愛がもたらした贖いという面です。御子は、御父と救うべき人類への愛から、進んで従われました。その時から人類の歴史における神の栄光、人となられた御子キリストの栄光が始まったのです。事実パウロは「そこで神はキリストを称揚し、すべての名にまさる名を与えられた」と記しています。（フィリッピ 2・9）

アタナシウスは、パウロの書簡のこの節に触れてこう述べています。「キリストを称揚された—この表現はみことばの本性が称揚されたことを意味しているのではない。みことばの本性は常に神と等しいのだから。むしろこれは、人性の称揚を意味している。それゆえ、この表現はみことばの託身（受肉）後にのみ語られる。『卑しくされた』のも『称揚された』のも人間の一面においてである。唯一卑しいものだけが称揚される。」（Adversus Arianos. Oratio I・41）さらに付け加えると、罪によって低められ、苦しみの状態において辱めを受けた人間性・全人性は、人であるキリストの称揚の内に新たな栄光の源を見出すことができるのです。

最後に、イエズスが御自身をよく「人の子」と呼ばれた事実について述べなければなりません。（例えば、マルコ 2・10、28、14・62、マテオ 8・20、16・27、ルカ 9・22、11・30、ヨハネ 1・51、8・28、13・31 等）当時の言い方では、この呼び名はすべての人と同じ真の人を意味しました。確かにキリストの真の人性を示しているのです。

しかしその場合も、聖書が示す厳密な意味は、イスラエルの伝承からくる歴史的関係を心に留めて確認されなければなりません。それは救い主の概念を明確に述べているダニエルの預言に使われている表現であり、その影響を受けた呼び名なのです。（ダニエル 7・13～14 参照）すなわち、「人の子」は単に人類に属する普通の人間を意味するのではなく、歴史を超えて世の終りに神から宇宙の支配権を受ける人を意味します。

イエズスの言葉、福音書の中のこの表現は、神と人間、天と地、歴史と終末、全てを包む大きな意味を含んでいます。イエズス御自ら理解させてくださいます。カヤファの前で神の子であることをはっきりと宣言されました。「人の子が全能なるもの右に座り、天の雲に乗り来るのをあなたたちは見るであろう。」（マテオ 26・64）神の力と栄光は人の子の内にあります。私たちは真の人、真の神、唯一の人、神に再び直面します。そして絶え間なく御子の御許に進み出て信じ、祈り、礼拝するのです。

《初代教会の信仰》

〈信仰は神の啓示に対する人間の答えです。〉このシリーズで展開しているイエズス・キ

リストのカテケージスは、使徒信経とニケア・コンスタンチノーブル信経に言及します。教会は信経を通して信仰を表明し、宣言しますが、信仰は教会の初めからイエズス・キリストにおける神の啓示の答えとして明確に示されていました。このシリーズでは全篇を通してキリストについての真理を見出す手段として、啓示の言葉に頼ってきました。ナザレトのイエズスは旧約で約束された救い主。救い主、キリスト—真の人（人の子）—は神の御独り子、真の神です。キリストについてのこの真理は〈十字架の死と復活という過越の出来事の頂点に至る、御言葉とみわざの全体から〉浮かび上がってきます。

イエズス・キリストのうちに神が御自ら示された生き生きとした啓示の全体は、〈信仰という応えを受けました。〉まず、救い主の御生涯と御教えを直接目撃した人々、つまり命のみことばの現実の姿を「目で見、聞き、手で触れた」人々において。（ヨハネ①1・1 参照）次いで教会の共同体の内に絶えず続くキリストを信じる人々においてです。イエズス・キリストに対する教会の信仰は最初どのように形づくられたのでしょうか。とくに初代教会と最初の数世紀に信仰がどのようにして形づくられ表現されたかを考えてみましょう。使徒から伝えられた聖伝が最初に発展したのはこの時代ですから、教会の信仰の形成にとって重要な時期なのです。

この問題に関する〈書き記された証言〉の全てが〈キリストの昇天後のもの〉であることに注目しなければなりません、それはキリストの十字架の死と復活という決定的出来事について直接目で見たことをはっきりと伝えるとともに、御誕生と幼年期から始まるキリストの御生活と働き全てをも伝えていきます。さらにその資料は〈使徒たちの信仰〉と初代教会共同体の信仰が、キリストの御生涯と使命の過越前（復活前）にすでに形づくられていて、聖霊降臨の後、強力に明らかにされたことをも証言しています。

「あなたはキリスト」

特に大切なのがフィリッポのカイザリア地方での出来事です。イエズスが使徒たちに「人々は人の子を誰だと言っているか」「あなたたちは私を誰だと思うのか」と尋ねられた問いにペトロはこう答えました。「あなたはキリスト、生ける神の子です。」（マテオ 16・13～16）これはマテオに記された答えですが、他の共観福音書にもキリスト、神のキリストという表現が見つかります。（マルコ 8・29、ルカ 9・20）いずれの表現もヨハネの言葉「あなたは神の聖なるお方である」（ヨハネ 6・69）と一致しますが、マテオに記されたのがより完全な答えです。すなわちナザレトのイエズスはキリスト、メシア、神の子です。

「神の子イエズス・キリストの福音のはじめ。」（マルコ 1・1）このようにマルコの福音書の冒頭に最初の教会の信仰と同じ表現が見つかります。マルコがペトロと深いつながりのあったことはよく知られています。さらに使徒パウロのいずれの教えにも同じ信仰を見ることができます。パウロは改心した後「諸会堂でイエズスを宣教し始め、イエズスは神の子である」と述べました。（使徒行録 9・20）さらに多くの手紙の中で様々な方法で同じ信仰を表しました。（ガラツィア 4・4、ローマ 1・3～4、コロサイ 1・15～18、フィリッポ 2・6～11、ヘブライ 1・1～4）使徒の頭ペトロとパウロは教会の信仰の源に

立っているといってもいいでしょう。

四番目の福音書の著者ヨハネは〈有名な言葉〉でその福音書を締めくくっています。これらのことを記したのは「イエズスが神の子であることをあなたたちに信じさせるため、そして信じてその御名によって生命を得るためである。」（ヨハネ 20・31）「イエズスが神のみ子であると宣言するものには、神がその中にとどまれ、彼は神にとどまる」と。（ヨハネ①4・15）この信頼すべきヨハネの声は、初代教会においてイエズス・キリストについて信じられていたこと、宣言されていたことを知らせてくれます。

〈ナザレトのイエズスは神の子です。〉これは、過越前（復活前）に主が示された御言葉とみわざを基に使徒たちが抱いたキリスト（メシア）への信仰の真理です。復活の後この信仰は強められ、書き記された証言を通して表現されました。

異教徒であるローマ人の百夫長が十字架の下で告白したことには大きな意味があります。「本当にこの人は神の子だった。」（マテオ 27・54、マルコ 15・39）この至上の時に恩寵と神の靈感がイスラエル人と異教徒に、すなわち全人類の心の中で真に神秘的な働きをしたのです。

復活後、弟子の一人トマがキリストの神性をはっきりと示す告白をしました。復活を信じようとしなかったトマは、復活されたキリストを目の前に見て叫びました。「あなたは私の主、私の神です」と。（ヨハネ 20・28）意味深い言葉「私の神」だけでなく「私の主」とも叫びました。旧約聖書の伝統では、主〈キリオス〉は神のことでした。聖書には至る所で名付けがたい神の固有名詞「ヤーウェ」が見つかりますが、それは「私の主」と同じ意味をもつ〈アドナイ〉で代用されています。ですから、トマにとってキリストは主、すなわち神だったのです。

このような多くの使徒の証言を考え合わせると、聖霊降臨の日にペトロが集まった群衆に向かって語った言葉は大きな意味をもつことが解ります。「あなたたちが十字架につけたそのイエズスを、神が主としキリストとされた。」（使徒行録 2・36）十字架上の死を受けた真の人、ナザレトのイエズスは待望の救い主であるとともに、主〈キリオス〉・神だったのです。

「イエズスは主、…主、主イエズス。」これは最初の殉教者ステファノが石殺しにされようという時、口にしていた告白です。（使徒行録 7・59～60 参照）またパウロの手紙に度々出てくる告白でもあります。（コリント①12・3、ローマ 10・9、コリント①16・22～23、8・6、10・21、テサロニケ①1・8、4・15、コリント②3・18 参照）

「イエズスは主である。聖霊によらなければだれもそう言うことはできない」と、コリント人への第一の手紙の中でパウロは述べています。（コリント①12・3）ペトロはカイザリアでの信仰告白の後、イエズスがはっきりと言われたことを聞きました。「その啓示は血肉からのものでなく、天にまします父から出たものである。」（マテオ 16・17）イエズスはこれより以前に仰せになっていました。「子が何者かを知っているのは父のほかにはなく…。」（マテオ 11・27 参照）真理の霊だけがイエズスを証明されるであろうと。（ヨハネ 15・26 参照）

教会の初めには、キリストへの信仰は神の御子・主〈アドナイ〉という語で表されまし

た。それは人の子の神性への信仰です。あらゆる意味でキリストは救い主、キリストだけが救い主です。言い換えれば、救いの実現者、与え主です。ところで、救いとは神のみが所有なさるもの、神のみが付与する権能をお持ちのものです。救いは罪からの解放であると共に、新しい命の賜、神の生命にあずかる賜です。「救いは主以外の者によっては得られない」と、ペトロの最初の説教の言葉は教えています。（使徒行録 2・12）

使徒の時代の多くの著書に同じ信仰を見ることができます。（使徒行録 5・31、13・23 等、パウロの手紙：ローマ 10・9～13、エフェソ 5・23、フィリッピ 3・20、ティモテオ① 1・1、2・3～4、4・10、② 1・10、ティト 1・3、2・13、3・6、ペトロの手紙① 1・11、② 2・20、3・18、ヨハネの手紙① 4・14、ユダの手紙 24、幼年期の福音書：マテオ 1・21、ルカ 2・11 など）

いつも御自身を「人の子」と呼ばれたナザレとのイエズスは、キリスト（メシア）、神の御子、主〈キリオス〉救い主であると結論づけることができます。それが使徒の信仰であり、教会は最初からその上に立てられました。

この上ない愛と崇敬をもって教会はこの信仰を守ってきました。真理の霊の導きの下、使徒に続く新しい世代、キリストに従う人たちへと伝えてきました。教会はこの真理をいつの時代においても本質的内容をいささかも損なうことなく保護するだけでなく、たゆまず研究し、人々の必要と可能性に応じて詳しく説きつつ教え守ってきました。これが救い主の再臨の時まで教会が遂行するよう求められている仕事なのです。

キリスト信仰の発展と公式化

「われは信ずる…唯一の主イエズス・キリスト、神の子、父より独り子として生まれ、すなわち父の本性から生まれ、神よりの神、光よりの光、真の神よりの真の神、造られずして生まれ、父と一体、天にあるもの、地にあるものは、すべて、主によって造られたと。子はわれら人類のため、また、われらの救いのために、天より降り、受肉し、人となり、苦しみを受け、三日目に蘇り、天に昇って、生ける人と死せる人を裁くために来られると。」（『カトリック教会文書資料集』 DS 125）

この宣言をもってニケア公会議（325 年）は、イエズス・キリストにおける教会の信仰を表明しました。イエズス・キリストは真の神であり真の人、神の子、永遠の御父と一体、そして私たちと同じ本性をもった真の人であることを表明したのです。教会はこの公会議の表明を実際に信仰宣言の中で唱え、ニケア・コンスタンチノーブル信経（381 年）として典礼や荘厳な儀式で繰り返していますが、このシリーズではそれを土台として考察を進めています。（『カトリック教会文書資料集』 DS 150）

公会議が表明した教義上の定義をみると、このシリーズでこれまでずっと考察してきた聖書に基づくキリスト論の本質を思い起こします。前回すでに述べた通り、それは使徒の時代からずっと教会の生ける信仰の中心をなすものでした。使徒の証言に従って、教会はその始めからマリアの子であり真の人、十字架につけられ蘇られたナザレとのイエズスは、神の子、主、「時満ちて」人となられたただ一人の世の救い主であると信じ、宣言してきました。

教会は最初からこの信仰を守り、後に続くキリスト教徒に伝えました。真理の霊の導きの下、それを深く研究し、啓示の論拠が示す本質的内容を説きながら教え、擁護してきたのです。ニケア公会議は教義の知識と公式化において画期的な役割を果たしました。キリストに従うすべての人に真の信仰の道を示した重大で荘重な出来事でした。それは、後に起こるキリスト教分派よりずっと以前のことでした。特に注目すべきは、教会がローマ皇帝から公の行動の自由を得た（313年）すぐ後に、この公会議が開かれたということです。新たな発展の道がキリスト教に開かれようとしている時であっただけに、それはあたかも一つの信仰にとどまるようにという使徒たちの意向を示すためであったようです。

公会議の定義づけ（公式化）は使徒たちから伝えられ新約聖書に記されているイエズス・キリストについての真理を表明するだけでなく、使徒の時代に続く教父の教えも表明しました。当時は迫害の時代、カタコンベの時代でした。ここで少なくとも二人の教父の名を挙げることができるのは嬉しいことです。聖なる生活と教えを保って、教会の聖伝と永遠の遺産を伝えるのに深く貢献した二人、すなわち 106 年にローマで獣の餌食となったアンティオキアの聖イグナチオと 202 年頃に殉教したリヨンの聖イレネウスです。二人はそれぞれの教会の牧者であり、司教でもありました。聖イレネウスに関して思い出してほしいのですが、キリストは「真の人・真の神」であると教えるとき、次のように書いています。「もし神がこの世で救いを実現されなかったとすれば、どうして人は救いを得られるだろうか？ もし神が人となられなかったとすれば、どうして人は神のもとに行けるだろうか？」（『異端論駁』 IV・33・4）これはニケア公会議で表明された救済論です。

キリスト教信仰の擁護

ここに記した聖イレネウスの言葉はその著書『異端論駁』からの引用ですが、この本はエビオニタスと言われる異端者の説に反論して、キリスト教の真理を擁護する目的で書かれました。使徒に続く教父たちは、姿を変えて次々と出てくる異端に直面し、確かで明白な真理をその教えの中で幾度となく主張しなければなりません。4 世紀始めのアリウスはよく知られています。その名を取って名付けられたアリウス派という異端を起こしました。アリウスは、イエズス・キリストが神であることを認めませんでした。マリアから生まれる以前に存在はしていたが、時間という次元の内に造られたと説いたのです。ニケア公会議はこのアリウスの説を排斥しました。排斥すると共に教会の信仰を表す真の教義を詳しく述べ、公式化しました。それが冒頭の信仰宣言です。独り子として生まれた神の子キリストは御父と一体であると断言し、当時のギリシャ文化に添った形で新約聖書全体に含まれた真理を表明しました。イエズスは御自分を御父と「一体」とであると人々の前ではっきりと言明されたので（私と父とは一つである）、人々はイエズスが冒涇を吐いたとして石殺しにしようとしていました。（ヨハネ 10・30～31）また司祭長や長老の前での取り調べでもはっきりと繰り返して言われました。その結果死の宣告を受けられたのです。この点に関するさらに詳しい聖書の記述についてはすでに述べましたが、ニケア公会議は総括して、キリストが神の御子であり、「御父と一体であり」「神よりの神」「造られずして生まれ」た御方であることを表明し、神の啓示に示された明白な真理、すなわち教会

の信仰をなす真理、キリスト教の基本の真理を確認したにすぎません。

公会議が公式化した時には、教会の考えや認識がそのような公式化のためにすでに熟していたといえるのですが、驚いたことにキリストを単に人間として捉えて神とは考えない、昔も今もある傾向に直面して、公会議の教義は真に今日的であることです。このような傾向を認めたり支持したりすることはキリスト論の教義を破壊することであり、同時にキリスト教の救済論全体を消滅させることでもあるのです。もしキリストが真の神でないなら、人類に神的生命を伝えることはできません。そして啓示と聖伝が示す意味での人類の救い主ではないということになります。教会のこの信仰の真理が否定されるなら、キリスト教教理の全体系が崩れ、信仰とキリスト教的な生活に不可欠の論理が消滅してしまいます。それは建物全体の土台を取り除くことなのです。

しかし教会はニケア公会議において荘厳に、そしてはっきりとキリストの神性についての真理を確認すると同時に、キリストの真の人性についての真理も主張し、教え、擁護しました。ところが、その真理さえも誤った見解や異端の論理の的となりました。ここでドケティズム（ギリシャ語で「～のように見える」キリスト仮現論）について述べなければなりません。この説はキリストの人性を否定するもので、キリストは真の身体を持たず、人間のように見えるだけであると説くのです。神が一人の女から生まれるはずはなく、十字架に付けられて死ぬはずもないと主張します。彼らの観点から見ると託身（受肉）と罪の贖いにおいて、私たちは身体を幻想として描いているだけということになるのですが、それは新約聖書のあらゆる章句に示された啓示に真っ向から反対するものです。ヨハネは「イエズスが肉体をとって下られたキリストであること」「みことばは肉体となって」と記しています。（ヨハネ①4・2、ヨハネ 1・14）パウロも、肉体をとったキリストは「十字架上に死ぬまで…従われた」と記しています。（フィリッピ 2・8）

明確な証言

啓示に基づく教会の信仰によるとイエズス・キリストは真の人です。ですからキリストの人間としての御体は真の人間の霊魂によって生かされています。この点に関して初代教会の教えは、使徒や福音史家の証言と合致します。そしてテルトゥリアヌスのような最初の教会学者の教えとも合致します。（『キリストの体』13・4）テルトゥリアヌスは「キリストにおいて、霊魂と体を見出す。つまり人間の霊魂と人間の体を」と書いています。しかし、この点についても反対の意見がありました。特にラオディキアの司教アポリナリスや、彼に続く人々（アポリナリストとして知られている）です。彼らは、キリストは真の人間の霊魂を持たない、神のみことばがその代わりをする、と考えました。確かにこの場合もキリストの真の人性は否定されています。

教皇ダマソ一世は、東方の司教への手紙の中で、アリウスとアポリナリスの間違いを指摘すると共に否定しました。「一方（アリウス派）は神の子の中に不完全な神性を置き、他方（アポリナリス派）は人の子の人性が不完全なものだ、と誤って主張している。もし神の子が完全に人間になれなかったら神の働きは不完全なものであり、私たちの救いも不完全である。そうすれば全ての人が救われることにならない。…人間の充満において救わ

れたことを知っている私たちは、カトリック教会の信仰に従って完全な神がその完全さにおいて人性をお取りになったと宣言する。」ニケアの五十年後に書かれたこのダマソ一世の手紙は、おもにアポリナリストに向けられたものです。数年後の第一コンスタンチノーブル公会議（381年）は、アリアニズムやアポリナリズムを含む当時の異端の全てを咎め、教皇ダマソ一世が、人間の霊魂（そして真の人間の知性と自由意志）をもったキリストの人性について宣言したことを確認しました。

ニケア公会議は救済論を用いて、御父と一体である御子が「私たち人間とその救いのために」人となられたことを教え、託身（受肉）を説明しましたが、ダマソ一世やコンスタンチノーブル公会議もアリアニズムとアポリナリズムに反対して、キリストについての重大な真理を伝えるために救済論を用いました。神のこの真の人性を否定する人々にとって、救済論が新たな方法で示されたのです。全ての人々が救われるには、（完全な）全人性が御子の内になければなりません。「取られなかったものは、（つまり人性をお取りにならなかったとすれば）救われることがない。」（『クレドンへの書簡』 101）

教義の注意深い公式化

アポリナリズムを非難して、カルケドン公会議（451年）は、キリストについて次のことを宣言し、ある意味でニケア信経を完成させました。「神自身は神性において完全であり、神自身は人性において完全であり、真に神であり、真に人であり、精神をも身体をもお持ちになり、神性においては御父と同質、人性においては我らと同質、『罪を除けば我らと全く同様であり』神性においては御父より永遠に生まれ、時至り、我らのため、そして我らの救いのため、人性においては処女マリア・神の母より生まれ、御自身は神の独り子、我らの主イエズス・キリストである。」（カルケドン信経『カトリック教会文書資料集』 DS 301）

このように、教父と公会議によってなされたキリストに関する教義の注意深い公式化は、常に私たちをただ一人のキリスト、私たちの救いのために人となられたみことばの秘義へと呼び戻してくれます。そして、啓示を通して知るにつれてキリストを信じ、キリストを愛し、救われ、生命を得るのです。（ヨハネ 20・31 参照）

神性と人性

キリスト論をめぐって開かれたニケア・コンスタンチノーブル公会議は私たちの信仰の土台をなす真理を明確に表し、信仰宣言において、イエズス・キリストは真の神であり真の人、神性においては神と一体であり、人性においては私たちと同質であることを確証しました。しかし、キリストの神性と人性の真理について公会議が説明した後、完全な神であると共に完全な人であるキリストの一性（一体性）の正しい理解に関して論議が起きました。

この論議は託身（受肉）の秘義、つまりキリストの受肉と処女マリアからの誕生がもつ本質的意味に関するものでした。3世紀に、マリアはテオトコス（神の母）と呼ばれていました。この呼び名は（他にも表れますが）、最も古いマリアの祈り、祈禱書の「終業の

祈り」に表現されています。「天主（神）の聖母の御保護によりすがり奉る。いと尊く祝せられ給う童貞…」教会はこの祈りを今日までずっと答唱詩篇で唱えてきました。この表現が見出される最古の文献はエジプトで発見されたパピルスに記され、3世紀から4世紀にかけての頃のものだと推定されています。

5世紀始めにネストリウスと彼に続く人々は、テオトコスという呼び方に異議を唱えました。マリアはキリストの母と呼ばれるべきで、神の母とは呼ばれないと主張したのです。この主張はキリストの一性（一体性）の問題に対するネストリウスの結論であったといえます。彼によると、一人の人—お告げから処女マリアの胎内に存在し始めた地上の人の—内に神性と人性が一致することはないと考えます。神の御子を御父より劣ると考えるアリアニズムとも、キリストの人性を単なる外見にすぎないと考えるドケティズムとも異なり、ネストリウスは聖なる存在、たとえば神殿のように、キリストの人性の内に神が現存されると説きました。つまり、キリストの内に神性と人性の二つの本性だけでなく、ペルソナも二つ存在すると考え、人間であるキリストの母マリアを神の母とみなすことも呼ぶこともできないと主張したのです。

ネストリウスの考えに反対して、エフェゾ公会議（431年）は啓示によって示され、キリスト教の聖伝、つまり聖なる教父たちによって確証されたキリストの一性を確認しました。（『カトリック教会文書資料集』 DS 250～266）キリストは永遠のみことば、神よりの神、永遠より御子として御父より「生まれた」方、時満ちて処女マリアより誕生した方であることを表明したのです。キリストは一つの存在なので、キリスト教の祈りと教父たちの教えの中で表現されてきているようにマリアは当然「神の母」の称号を受けべき御方なのです。

エフェゾ公会議の定義は後に「合同信条」として公布され、それによって長い間続いていた論争に終止符が打たれました。「私たちは次のように宣言する。すなわち神の独り子である主イエズス・キリストは完全な神であり、理性的靈魂と肉体を備えた完全な人間である。神としては、この世の前に父から生まれたキリストは、終りの時に我らのため、我らの救いのために処女マリアから人間性を受けて生まれた。神性においては父と同質であり、人間性においては我らと同質である。こうして二つの本性の一致が行なわれた。こうして我々は唯一のキリスト、唯一の子、唯一の主を宣言する。この混合することのない一致のために、我々は聖なる処女が神の母（テオトコス）であると宣言する。神であるみことばが受肉し、人間となって、受胎の瞬間より、彼女（マリア）から受けた神殿を自身に一致させたのである。」（『カトリック教会文書資料集』 DS 272）ここにみことばによってマリアの胎内でペルソナが一致して実現した人間—神殿の驚くべき概念が示されています。

「合同信条」として知られている文書は、アンティオキアの司教ヨハネとアレキサンドリアのキリロスの間の書簡のやりとりの結果生まれました。彼らはそれにより、教皇シクスト三世から栄誉を受けました。そこではすでに唯一の主体、つまりイエズス・キリストにおける二つの本性の一致について語られていました。しかし、いわば一人のキリストにおける二つの本性の結合と混合を唱えたエウティケスとキリスト単性論者が現れたがため

に、新たな論争が起こったので、カルケドン公会議が数年後に開かれました。この公会議では大聖レオ教皇の教えに従って、二つの本性の一致を実現させる主体に関して明らかにするため「ペルソナ」ということばが導入されました。これこそキリスト論発展の行程において画期的なことでした。

教義上の決定を公式化するにあたり、カルケドン公会議は、ニケア・コンスタンチノープルの定義を繰り返すと共に、エフェゾのキリロスの教え、並びに『フラヴィアヌスへの書簡』を用いました。「ローマの司教レオがエウティケスの誤謬を滅ぼすためにフラヴィアヌス大司教に宛てた書簡を、ペトロの信仰宣言に合ったもの、邪悪な教説に対して正しい教義を教えるものとして受け入れる。」「われわれはみな教父たちに従って、心を一つにして次のように教え、宣言する。われわれの主イエズス・キリストは唯一の同じ子である。…同じ唯一のキリスト、主なる独り子であり、二つの本性において混合、変化、分割、分離せずに存在する。この結合によって二つの本性の差が取り去られるのではなく、むしろ各々の本性の特質は保存され、（両方の本性は）唯一のペルソナ（位格）と唯一のヒュポスタシス（自存者）にともに含まれている。また存在するものは二つのペルソナに分離し分割されたものではなく、唯一の同じ独り子、神のみことば、イエズス・キリストだけである。これは預言者たちが彼について告げ、イエズス・キリスト自身がわれわれに教え、教父たちの信経がわれわれに伝えたことである。」（『カトリック教会文書資料集』DS 300～302 参照）

これは聖書と聖伝が伝えるキリストの秘義に対する明白で力強い信仰の統合です。ここでは、一般に使われている言葉として本性とペルソナという表現と概念が用いられました。公会議の表明の後、この語は哲学や神学の専門用語に格上げされたのです。しかし公会議は、この概念や言葉を特定の哲学体系と関係のない、日常語から採用したのです。公会議の教父たちの言葉の選択における的確性に注目しなければなりません。ラテン語の「ペルソナ」にあたるギリシャ語「プロスポン」（ギリシャ語原文に使われている）は、人間の外的・現象的側面を表す語〔本来の意味は芝居のマスク（仮面）〕なので、教父たちはこの語と共に人間の存在論的な面を明確に示す別の言葉、すなわち「自存者（ヒュポスタシス）」も用いたのです。

殉教の試練さえ受けつつも、（信仰）証言のために多くのキリスト教徒が光と力を見出した公式文の言葉に合わせて、私たちも救い主キリストへの信仰宣言を新たにしなければなりません。